
僕の母親は女神様なのです。 ~ Diva ex libellus ~

ながも ~

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の母親は女神様なのです。 Diva ex libellus

【Nコード】

N6399P

【作者名】

ながも

【あらすじ】

ネギま！に似てるが何かが違う世界。出来る限り多くの人が幸せに生きていけるように、不幸を少しでも減らす為に。

世界の滅亡を防ぐため、原作知識なんて持たない彼らの戦いが今始まる！

（嘘成分が多少含まれています）

一応、（転生？）オリ主モノです。原作知識持ちは登場しません

が、その手のモノが苦手な方は御注意下さい。

序盤現在、オリ主不在で進行中です。暫くの間、弱改造ゼクト君をお楽しみください。

今更ながら、プロットを見るとオリ主の活躍が少ない事に気が付きました。もしかするとこのSSは、オリキャラに影響された人物達こそが主人公かもしれません。

このお話を読む前の諸注意

この小説に興味を持っていたきありがとうございます。

この小説は『魔法先生ネギま!』の二次創作です。

ですが多量に捏造設定や設定改変、最終的にはキャラ改変が含まれますのでご注意ください。

具体的に言くと、『ネギま!』と『ネギま?!』くらいの違いがあります。

また、作者のオリジナル作品『俺と私と魔法の世界』(なんと未完)のキャラクタが、プロット時点で7名程混ざっています。増える事は流石に無く、減ったりするかもしれませんが、最低でも1人出ます。これまたご注意ください。

ただし、設定上存在しているだけで、登場しない可能性は高いです。

さらに、文章構成が結構アレなのでおかしい処とかあったら教えて下さい。できるだけ直します。

それでも直って無ければ「所詮はながも」だ、人の言葉(文法)も解さんのだろう」と蔑んで下さい。

最後に。

このSSは原作32巻まで発売された頃に設定を構築開始しており、33巻発売後に若干の修正を加えつつ、34巻以降の設定を無視したり、取り入れたり、そもそも見なかった事にしたりして造られたSSです。

そもそも、32巻以前の設定すら場合によっては無視・改変・魔改造します。ご注意ください。

ご注意くださいゲシュタルト崩壊です。

すこくむかしのきおく

カミサマって何だろう。

多分、皆に訊いたら『あの人』の事だっと思う。だって、いつも「あの方のお陰で私たちは」って言ってるから。

もちろん、僕もカミサマは『あの人』の事だと思う。

でも、僕にとってあの方はカミサマの前に『お母さん』で、『お姉ちゃん』で、『大好きな人』なんだ。

お仕事で忙しいお母さんには会えなかった。時々帰ってこない事もあった。

でも、あの人はいつも居てくれたし、あの人とお仕事してる沢山の人が一緒に居てくれた。

妹が生まれてからは、沢山いた人達も減っちゃったけど。あの方は変わらず一緒に居てくれた。

あの人がお仕事の時でも一緒に居させてくれて、僕の事を見ていてくれた。

本で読んだ魔法を使って見せたら、凄くびっくりしてた。壁に穴が開いてた。僕も凄くびっくりした。

でも僕が驚いてる間に、あの方は壁を直した。やっぱりあの方は凄い。

怒られた。凄い怒られた。

魔法で持ち上げられて、ぐるぐる回された。凄い怖かった。でも、ちょっと楽しかった。

あの人は、髪の毛の色はだけ違うけど、それ以外はお母さんにそっくりだから。

だから、時々間違えて『お母さん』って呼んじゃうけど、あの人は嬉しそうな顔をして僕を抱きしめてくれた。

それが嬉しくて、僕は時々、『お母さん』って呼ぶんだ。

あの人が『倒れた』ってお母さんが言ってた。嘘だっと思った。でも、いつも何処かに出掛けてる伯父さんも居たから、本当なんだっと思った。

いつも笑顔で、優しくて、凄く強いあの人が倒れた。

毎日遊びに行っても、凄い速さでお仕事をしてるあの人が倒れた。あの人も、カミサマでも、無理しちゃうと倒れちゃうんだ。

だったら、無理しなくても良いように、僕と一緒に頑張れば良い。そう思ったから、僕は強くなりたいと思った。カミサマくらい強くなりたかった。

あの人を助けられるくらい、守れるくらい強い力が欲しかった。

その時、僕はいつも見ている世界の外が知りたくなった。

街は行った事があるけれど、もっと外、全然知らない世界が知リたかった。

あの人も、世界は凄く広いって言ってたから。

だから、僕は、世界が見たくて、『家出』をしたんだ。

第1話 『紅き翼』（前書き）

途中から書式？フォーマット？何て言うんでしょうか。

まあ、書き方というか、表現方法が変わりますが、仕様です。

今回は最初の話だったので、個人名が未登場だった為に最初がこんな感じになってました。

次回からは、各キャラクタ視点で進めていく予定です。

あー、しかし一人称視点書きやすい。

今回の内容は、主に説明とか解説とかそんな感じ。

一応、原作を知らない人でも解りやすいように書こう、と思った
ら説明祭りが開催してました。いつもの私ですね。

第1話 『紅き翼』

魔法世界。

そこは旧世界（地球）とは別次元に存在する、魔法が極普通に存在する世界。

現在その魔法世界では、北のメセンブリーナ連合陣営と、南のヘラス帝国陣営という、2つの巨大グループに分かれて戦争をしていた。

後に『大分裂戦争』と呼ばれる戦争……その中でも、最も激しい戦いが繰り広げられているのが両陣営の間に位置する、ウエスペルタティア王国である。

そもそもヘラス帝国とは、亜人と呼ばれる、この魔法世界に遥か昔から暮らしていた、角や長い耳などの特徴を持つ人類の事である。それに対してメセンブリーナ連合は、100年ほど前に旧世界からやってきた人類、通称『旧世界人』だ。

旧世界人は魔法世界に渡って来た後、何時の間にか各地に集落を作り、集落は街となり、都市となり、最終的に連合と名乗る程に大きくなっていった。

そして、ウエスペルタティア王国に暮らす人間は、その旧世界人と極めて近い容姿をしていた。実際、遺伝子上で見ても殆ど変わらないのだから、同じ種族と見ても良いだろう。

と、そんな状況で人種戦争が起るとどうなるか。
簡単な話、戦力確保の為に王国を取り込もうとするのだ。連合は「同じ人間だから」と、帝国は「昔から一緒に暮らしてきたから」と。

そして、どちらかと言うと連合が強引だった。

旧世界でも幾度かの戦争を越え、人種差別は薄まって来ているが、霊長類こそ最上という風潮は残っている。

そして何よりも、魔法使いは自分達が魔法を使える事を誇りとしていた。つまり、軽く選民思想に染まっていた。

早い話、旧世界人は亜人達を差別していた。

何せ「肌の色が違う」というだけで人類は差別をした事があるのだ。角や翼が生えてたり耳が長かったりと、シルエットからして造形が違う亜人への視線は厳しかった。

まあ人間とは自分達と違う存在を排除しようとする傾向があるので、仕方ないっちゃ仕方ないのかもしれない。

まあそんな訳で、同じ人類が棲んでいる以上、ウェスペルタティア王国は連合所属である——あくまで連合側から見た場合だが——という建前の元、連合は軍をヘラス帝国と連合の間……ただし連合側から見た場合の境界なので、ウェスペルタティア王国とヘラス帝国の間まで軍を進めたのだ。

連合側の言い分としては「防衛の為、帝国との境界に軍を派遣しただけ」だそうだが、帝国側から見れば、仲良くしていた国の領土へ勝手に他国が駐屯しているのである。

その後、色々やりとりがあったのだが、面倒臭いので割愛する。結論から言うと、ウェスペルタティア王国を巡って連合と帝国で戦争が発生した。

王国からしてみれば「どうしてこうなった」であるし、そもそもどちらの陣営でも無いのでそんな戦争されても困る。というか両陣営の間に位置しているので、戦場になった。

言い忘れていたが、ウェスペルタイア王国は中立である。というか、独立国である。

そして、その戦場にされてしまった、実に可哀そうな王国の首都であるオスティアへ向かう、3人の男が居た。

彼らの名は『紅き翼』、自称最強の魔法使いであるナギ・スプリングフィールドをリーダーとし、胡散臭い魔法使いアルビレオ・イマ、そして剣士故に魔法を使わないので目立たない青山詠春。

最近、戦場で名を聞くようになってきた新鋭の戦闘集団である。

— side ナギ

「クソ、遅かったか……もう始まってやがる！」

俺達がオスティアが見える距離まで来た時には、既にヘラスの艦隊が攻撃を開始していた。

しかも、付近には鬼神兵まで居やがった。オイ、スペース確保なのか知らんけど、森を焼くんじゃねえ森を。まあ広域殲滅魔法を使う俺が言つのも何だが。

……ん、アレは砲撃艦か？

「……ってオイ、アレが積んでるのは精霊砲じゃねえか?! あんなモン撃つたら街が吹っ飛ぶぞ、何考えてんだあいつ等、ウエスペルタティアを取り戻すんじゃないかったのか?!」

「恐らく、それは建前なのでしょう。実際は丁度良く理由が出来たから侵攻した、という感じでしょうか?」

そうアルに言われ、今回の戦争の発端とやらを思い出してみる。ウエスペルタティア王国は主に人間が棲む国だ。ああ、ちなみに人間ってのは亜人や魔族以外って意味だ。結構人間以外も棲んでるんだが、一番多いのが人間だ。

だから、確か国民の殆どが人間のメセンブリーナ連合が「ウエスペルタティア王国は人間が棲む国であるので、我ら連合の一員である」とか言いだして軍を派遣したんだったか?

それに対してヘラス帝国は「中立国であるウエスペルタティア王国に侵攻する連合は排除する」とかそんな感じだったか?

まあ、とりあえずハッキリと解るのは、両側から「敵国から奪還する」っつー名目で攻撃されてるウエスペルタティア王国が涙目って事だな。

、ちなみにアルってのは、アルビレオの事だ。いつもは胡散臭い笑顔をしてるが、流石に今は真面目な顔をしている。

って、もうスグ精霊砲のチャージ終わっちまうんじゃないか? 流石に最強の魔法使いである俺様でも、この距離から戦艦落とすのは難しい。

「まったく、せめて建前位守れっつーの！」

「五月蠅い、だったら文句を言う前に早く飛べ！」

そう言うのは詠春だ。コイツは俺達の中でも一番早い。まあ早いといっても、戦闘時の動きが素早いって意味で……つまり、移動時の速度は俺達と対して変わらなかったりする。

「精霊砲が撃たれます！ 衝撃に備えて下さい！」

「間に合わなかったか——ッ?!」

遂に帝国軍の戦艦から、ゴォツという如何にも威力高いですって音を出しながら、砲撃が放たれた。

アレはヤバイ。多分だが、俺の魔法障壁でも防ぎきれないんじゃないか？

……まあ、精霊砲は問題じゃない。いや、問題ではあるんだが、今はどうでも良い。

一番の問題は、そのヤバイ威力の精霊砲が、オスティアに届く前に掻き消されたって事だ。

一体、何が起きた？ 王都の魔法障壁に防がれたのなら解るが、消えるっつーのはオカシイ。

そう思ってたなら、帝国軍が答えを教えてくれた。

「どうやら、王都は『黄昏の姫御子』とやらの力を使って防いでるらしい。」

「何かで聞いた事がある。黄昏の姫御子って奴は確か、魔法や気を無効化する能力があるらしい。なるほど、確かに魔法を無効化出来るなら、精霊砲も消せるかもな。」

「……ところで、帝国軍は大声で喋ってるんだが、念話とか通信じゃなくて良いのかあいつら。」

「黄昏の姫御子……って確か王族、しかもまだ小さな女の子だって聞いたぜ！？　なんで最前線に出してるんだ？！」

「鬼神兵を出された為に質で負け、さらに艦隊で来ている為に数でも不利です。小国には他に手が無いのでしょう……あと、黄昏の姫御子は王族以外にもいますよ、まあ現在生きているのはナギが言った小さな女の子だけです」

「アルの言った通り、確かに王国は領土が小さいから兵力が少ない。そもそも都市が空中に浮いてるからな、魔物なんかも来ないだろうから、あんまり自衛しなくて良いんだろ……それが仇になったか？　っていうか、姫御子って王族以外にも居たのか。ホント、アルは物知りだぜ……伊達に歳食って無いな！」

「まあ戦争だからな、出し惜しみなんかしてココで負けたら……国が滅ぶだろう」

「詠春の言う通りです。それに現・黄昏の姫御子は数年前から外見

が変わって無いと聞きます。見た目通りの年齢では無いでしょう……
…天然か、後天かは解りませんが」

「くそつ、まあ俺は難しい事は解んねえ……だから、今はアレをブツ飛ばす！」

「あつ、オイ！」

さつき精霊砲が消えた付近の塔に鬼神兵が近付いていた、という
か既に手を伸ばしてやがる。

流石に、魔法無効化能力でも鬼神兵は消せないらしいな……まあ、
消されたら俺達の出番も無くなるからちよつと困るんだが。

何にせよ最初に狙うのは、あの塔に手を伸ばしてる鬼神兵で決定
だ！

「ハッ、もう少しで手が届きそうだったみたいだが。残念だったな、
時間切れだ！！『雷の斧』！！」

どーん、と凄まじい音を立てて鬼神兵が倒れる。

俺の『雷の斧』の威力はスゲエからな。鬼神兵だって一発だ。
攻撃方向も、ちゃんと街の反対側に向けて撃ったからな、瓦礫く
らいは飛ぶかもしれないが、鬼神兵が街に倒れ込むより良いよな。怪
我した奴とか居るかな……まあ、居たらすまん、緊急事態だったん
だ、許してくれ。

「あー、やつぱ小さいな…… ったく、そんなガキまで戦場に連れてくるんじゃないよ。いや戦場が来たのか？ どちらにしろ、ガキは真っ先に逃がすだる普通…… ま、後は俺に任せときな」

「お前は一体…… 赤毛の、あの魔法の威力…… まさか、紅き翼『千の呪文の男』…… ツ?!」

おお、俺も有名になったな。

「そう、俺がそのナギ・スプリングフィールド！ またの名をサウザンドマスター……!」

（うわ、自分で言ってるよコイツ……）

（ギリギリでしたからね、テンション振り切ってるんでしょう…… 普段通りですけど）

コソコソうつせーぞ、アル、詠春。

いっそお前らも言えば良いんだ、詠春なんて最近『サムライマスタール』とか、カッコイイ呼び名付いてるじゃないか。まあ俺の方がカッコイイけどな。

ま、とりあえず目の前の鬼神兵を片づけるとするか。
チヨロチヨロ飛んでる魔族は…… 2人がなんとかするだろ、たぶん。

「広範囲攻撃つつたらコレだよな……えーと、契約により我に――詠唱長え、内容的に最後の部分だけで良いだろコレ……あー、百重千重と重なりて、走れよ稲妻、『千の雷』……！」

おー、流石広域殲滅魔法。鬼神兵すらあつさり沈んだぜ、まあ俺だからけど。

後ろでジジイも感心してるしな、実に気分良いぜ。

……ちつせえのは詠春とアルが倒してるし、あとは戦艦だけだな。

「安心しなジジイ共、俺達が全て終わらせてやる。残りは戦艦だけだ……鬼神兵よりは弱いだろ？」

「しかし……」

「あー、面倒臭え。良いか？俺は、最強の魔法使いだ。だから勝つ。解ったか？」

「ぬう……（この若さで、この魔力放出量……確かに、何とか出来るのかもしれん）」

「カンペ見ながら呪文唱える最強ですか。説得力に欠けますね？」

（……………あれ、急に不安になってきた）

アルは時々説教臭いんだよな、丁度今みたいに。
あれか、コレが歳って奴か。アルは長生きらしいからなあ。

「……それに、貴方が如何に強くとも、個人では世界を変える事など出来ませんよ」

「世界を変えるとか、知った事じゃねーよ。俺は俺のやりたい様にやるだけだ、バーカ」

いきなり世界とか、規模でかくなりすぎだろ。

だが最強を目指すなら、世界くらい変えて見せるべきなのか？
いまいち解らん。

……ん？

「……………」

あ、忘れてた。

「よう、穰ちゃん。名前は？」

「……ナ……マエ……？……アスナ」

「おー、アスナか」

「アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア」

「って長えなオイ。けど……アスナってのは良い名前だな！ よし、ココで待つてなアスナ。俺の活躍を特等席で見せてやるよ！」

残りの敵は戦艦ばかりだからな、ココまで届くのは精霊砲くらいだが、アレはチャージが長いから、その間に落とせる。っていうか、アスナに無効化されるから、もう撃ってこないだろ。

「いくぞアル、詠春！ 敵は雑魚ばかりだ、俺達なら行動不能にする位余裕だぜ！」

だから、この時は完璧に油断していた。
ココに居ても安全だと思ってしまった。

鬼神兵を倒して気が緩んでいたんだろう。気付いた時には、時既に遅し……だ。

「死ねエ、黄昏の姫御子！！」

「——んなっ？！」

声がした方へと、咄嗟に視線を向けると、そこには階段を上って来たのか、肩で息をしているヤツが居た。

その手に拳銃を持って。既に狙いは定まっていた。

アレは実弾の銃だ、魔法銃じゃない。つまり、アスナは無効化で

きない。

そして、俺が居るのはアスナを挟んで反対側。自分に向かつてくる攻撃を防ぐんなら余裕だが、離れた所の誰かを守るのは無理だ。

アスナ目掛けて進む銃弾がスロー再生の様に見える。

人間の目で弾を見れるのか解らないが、事実この時は見えたのだから仕方ない。

だが見えていても、間に合わない。

クソ、誰かアスナを守ってくれ……！

その願いが通じたのか、弾とアスナの間に入る影があつた。

「――『魔法の射手・戒めの風矢』」

その影は障壁で弾を防ぐと、即座に敵を捕縛した。

……正直、その技に見惚れた。

銃弾に追いつく瞬動も凄えし、無詠唱で捕縛魔法まで使っていた。しかもあの魔法、無詠唱なのに並の魔法使いの詠唱魔法より構成が確りしてる気がする。

それに、俺と比べ物にならない程、魔力制御が上手い。俺も結構制御には自信があるが、正直アレを見た後だと自信なくなるくらいだ。

今まで俺より強い魔法使いを見たこと無かったが、コイツは違う、別格だ。今まで最強って言ってたのが恥ずかしくなるくらいに。

俺が呆然としている間に、捕縛された男は王国の兵士に連行され

ていた。何時の間にかアスナも居なかったが、恐らく避難させられたんだろ。一度狙われたんだ、また来るかもしれないからな。

だが、そんな事はどうでも良い、とまでは言わないが。それ以上に目の前の男から目が離せない。

……コイツは一体誰だ？

「おや、もしかして……ゼクトですか？」

「うむ、ワシの名はフィリウス・ゼクト。その男の様に名乗るなら……最古の魔法使い、とでも名乗ってみるかの？ ……久しぶりじゃな、アルビレオ」

——これが、俺と御師匠の出会いだった。

第2話 崖の上の筋肉（前書き）

鈍亀更新でお送りします。

そう言えば、呪文詠唱には羅語や希語の振り仮名とか書いた方が
良いのですね？ 読み辛いかと思って抜いてあるのですが。

あと、台詞と台詞の間の空白行も無い方が良いでしょうか。

「別に良いんじゃない？」という事ならスルーで、ご意見は感想欄
からでもお願いします。

—— 卑怯にも露骨な感想要求をする筆者がいた！

第2話 崖の上の筋肉

side ゼクト

「コイツが旧世界、日本の鍋料理って奴かあ！　じゃ、早速肉を――」

「あつ、ちよつ、おまつ……何、肉を先に入れてるんだよ！？」

「……鍋は竜トカゲの肉でも良いのか？　まあ旨ければそれで良いんじゃないが」

ワシらは今、ウェスペルタティア南端の森でキャンプをしており、帝国軍艦隊からオスティアを防衛した後、そのまま王国・帝国間の国境線まで追い回してきたんじゃない……まあ、近郊の森なんかには潜伏されて、ワシらが王国から離れた直後にでも再襲撃されたら溜った物ではないのう。

しかし、幾ら帝国軍がウェスペルタティア王国に侵攻して来たとは云え、出来れば帝国とは戦いたくは無いんじゃないが――

「バツ、馬鹿！！　鍋には火の通る時間差と言うモノがあつてだな？！　まずは野菜を入れて――」

「あー、うつせーぞ詠春。いーじゃねえか、ウマけりゃ。肉入れようぜ肉！」

「いや、だから肉は火を通し過ぎると硬くなるから最後に入れるんだよ!」

「……フフフフ、詠春知っていますよ、日本では貴方の様に鍋に拘りを持つ者の事を……『鍋將軍』と、呼び習わすそうですね……」

—— なん、じゃと……ッ!?

「ナベ・シヨーグン!? ……解ったよ詠春、俺の負けだ。今日からお前が鍋將軍だ……」

「……んー、嬉しく無いなあ……(っっていうか、鍋奉行の間違いじゃ……)」

あー、何か違うと思ったら……鍋奉行じゃったか。っっていうかナギは將軍を知つとるのか? 何で知つとるんじやろうな、馬鹿なのに。

というか、誰も詠春の話聞いておらんな、今まで苦労して来たんじやろうな……助ける気は無いがの。

「ところで詠春。鍋奉行なのは良いのじゃが、何故豆腐を先に入れたんじや? シイタケが先じゃ無いのか?」

「む、ゼクト殿……結構詳しい? まあ、シイタケをまだ入れて無いのは、どうせこの馬鹿が肉ばかり食って具の回転が速いだろうか

ら、飽きない様に後で味を少しでも変える為に取っておいたんだよ」

「ほう、なるほどのう……その発想は無かったわ」

「な、何だこの話題は……サッパリ解らねえ。まさか御師匠もナベ・シヨーゲンなのか？……流石御師匠だぜ……」

何か馬鹿が変な勘違いを……いや、気にしないのが正しいのか？
誰かこの良く解らない状況から助けてくれんかのう……あ、この
ソース旨い。

「何だこのソース、うめえ!!」

「これこそが日本の誇る万能ソース、醤油だ!」

「それと大根おろしですね」

「ちなみにワシはポン酢も好きじゃぞ」

ポン酢、アレは良いモノじゃ……最近戦争で流通が混濁しておる
所為で入手が困難じゃが。

……ポン酢の為に、戦争をさっさと止める必要があるかの？

「御師匠、何だその『ポンズ』ってのは。それもうまいのか?!」

「ん？ おお、ポン酢というのは柑橘系の果実を使ったソースでの

？ 独特の酸味があつて旨いんじゃない？」

「ほう、ゼクト殿はポン酢を御存じか……残念ながら今は手元にありませんが、今度ポン酢も用意して鍋を囲みましょうか！」

「それは良いな……うむ、楽しみにしていようかの」

「ちえつ、ポンズは無いのか。まあ、その今度の鍋つてのに期待だな！ あー、しかしこの醤油うめえな、スゲエうめえ」

「いや、ナギお前……日本に來た時寿司食つたる？ ……まさか醤油付けずに食つてたのか？」

何、寿司を醤油無しで食つたじゃと？

……いや、この馬鹿の場合は玉子や軍艦巻き（名前が強そう）ばかり食つておつたのかもしれない。

それ以前にイギリス生まれらしいから、生魚を喰う文化は無いと思うが……まあ何も考えて無さそうじゃな。

「しかし、姫子ちゃんにも食わしてやりたい位の旨さだな。……お持ち帰りとか出来ねえの？」

「姫子？ ……ああ、オスティアの姫御子の事ですか。今は最前線で防衛の要として珍重されて居る様ですので、戦が終われば……自由に行動もさせてあげられるかもしれませんよ」

「その可能性は高いのう……じゃが、鍋は囲んで食うのが旨いのであつて、冷めると旨く無いぞ。いや冷めても旨い鍋もあつた気がする

るがのう……思い出せん」

……それにしても、なんでワシはこいつらに着いてきてしまったんじやろうな。

その場の勢いというか、流れと言うか……勝手に塔に上ったから、さっさと逃げないと面倒な事になりそうじゃったし。

そうじゃ、この馬鹿がワシに弟子入りさせてくれと頼んできたのが始まりだったか。

クツ……この外見じゃから、いつも子供扱いされるのに、珍しく本気で尊敬の眼を向けられたからつい承してしまったんじゃない。

まあ良い、この馬鹿を一人前……いや、本当の『最強の魔法使い』に育てれば、この戦争も終わらせられるかもしれないな。ここまで来る間にちよつと教えただけで魔力制御が上達しておったし、案外現実的かもしれんのう。

……というか、あの時『千の雷』を詠唱短縮して撃つておったよなコイツ。もしかバグキヤラか？ いやしかしバグキヤラの気配は無いんじゃないが。誰かが修正したのかのう……アルビレオか？

「————が言い出したんだろうが鳥頭……あと肉ばっか食うな、野菜食え野菜」

む、思考しすぎたか……って気付いたら殆ど肉が無くなつとるし。残りは鍋に入つとる分だけか？！

おのれ、せめて豆腐は、豆腐は頂くぞ……ッ？！

「食事中失礼……ッ！ 俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン！……いっちょ殺ろうぜッ……！」

何か突然鍋に巨大な剣が突き刺さったと思ったら、崖の上に筋肉が居た。

むしろ何故鍋を狙ったんじゃ、アレか。ワシらのド真中を狙ったのか？

「空中豆腐キャッチって、ワシ凄くないかの？——で、何じゃあの馬鹿は」

「フツ、御師匠……俺なんて肉3枚獲ったぜ！——とりあえず帝国の兵士って訳じゃ無さそーだな、放浪の傭兵って言ってるし。オーイ詠春、剣士らしいからお前の相手……うおっ」

「フツ、フフフフフ……食べ物で粗末にする者は——」

あ、詠春が壊れおった。

しかし鍋を頭から被っておるが、熱くないのかのう……アレか、『心頭滅却すれば火もまた涼し』というヤツか……こいつ、やりおる。

……あれ、もしかして詠春もバグキアラ？ するとこの紅き翼、ワシ以外全員バグキアラって事に……うむ、気付かなかった事にしよう。特に問題は無いじゃろうし。

「どーした、来ねーのかぁー？ あー、来ねーならこっちから行く

」――斬る」

おお、詠春が行ったか。

何か暴走しとる気もするが……そんなに鍋を引つ繰り返されたのが許せんのかのう？ それともやっぱり熱かったんじゃないやろうか。

「お？ あのおっさん、詠春の攻撃凄いでるぜ」

「あの男……見た事があります。確かちよつと前に南で話題になった剣闘士ですよ」

「中々やりおるのう、詠春の剣術は凄いのじゃろう？……いや、両方とも本気出しておらんのか」

あの筋肉の剣は詠春の最初の攻撃で半分切断されておるし、詠春も身体強化こそしておるが……神鳴流の奥義を使っておらんし。

……あ、素手で剣弾いた……あの筋肉、本当に生身の人間か？
もしかしてまたバグキャラか？ 何じゃ、『紅き翼』はバグキャラの会合か？ もしかしてワシもその内バグるのか？

「おっさんが何か投げたぞ！」

「……え、意味が解らん。如何言う事じゃ？ 詠春もなんで動きが

止まっておる……」

……筋肉が取り出したのは女性型の精霊体が封入されたカプセルか。

服を着ておらんから、風俗関係のアイテムかのう……美女3人に幼女1人。奴の趣味か？

「ッ！ いけません、詠春は生真面目な性格が災いしてお色気に弱いのです！ このままでは詠春は無防備になり、あの男にやられてしまいます……ナギ、詠春がやられる前にあの男に攻撃を……！」

「へっ？ あー、解った。いや、良く解らねーけど。——魔法の射手、雷の一矢！」

アルビレオが胡散臭い笑みを浮かべながらナギに言う。

これは間違いなく詠春ごと吹っ飛ばす気じゃろ、何考えておるんじゃコイツ？ まあ何も考えて無い可能性が高いんじゃないが。

あ、詠春がやられおった。タヌキで。

「フッ、一丁あがり——ッぬん！」

おおっ避けおったぞ、あの筋肉！ じゃが詠春が吹っ飛んだな。………良い感じに詠春がこっちに飛んで来たんじゃないが、狙ったのか？

まあ、コレはあれかのう……

「おのれ、あの筋肉。よくも詠春を！……とでも言えば良いのか？ アルビレオ」

「フッフ……オマケで最後に、良い奴だったのに——を付けるとなお良いんじゃないですかね。ああ、それと私の事はアルで良いですよ」

「了解した。何時まで共に居るかは解らんが、よろしく頼むぞアル」

そう返事をする、胡散臭い笑みを消して真面目な顔でコチヲを見てくる。

……相変わらず、何を考えておるのか解らん奴じゃの。

そんなやり取りをしている間に、ナギが動いた。

「お、出たな情報その4！ 赤毛の魔法使いは弱点無し、特徴……無敵！」

「そんなに褒めんなよ、おっさん」

「奇遇な事に、俺も南じゃ無敵と滅法噂の男だ」

両者が構えを取る。

——ナギは杖を構え、魔力を充填させる。
——筋肉は両手を構え、全身に気を巡らせる。

「剣は無くても良いのかよ、おっさん」

「心配すんな、俺は素手の方が強え」

「そうかよ。……アル、御師匠、手出しは無しだぜ？」

……手出し？

ふむ、つまり力試しがしたいと言う事かの。

「言われずとも」

「バカの相手はバカにさせるのが一番じゃ。存分にやれ」

さて、これまでの動きからあの筋肉が中々やる事は解っておるが、ナギは何所までやるかのう？

第3話 2人はバグキャラ！ MAX/HEAT（前書き）

サブタイトルふざけました。

あと、作風が安定しない。

第3話 2人はバグキャラ！ MAX/HEAT

自称、最強の魔法使い、ナギ・スプリングフィールド。

他称、南で最強の男、ジャック・ラカン。

両者共に張りつめた緊張で、動くタイミングを掴めずに日が暮れるのではないかと言う程の睨み合いが続き――

――バキッ

紐無し逆バンジーから戻って来た詠春が木に衝突、その音を合図に両者一斉に駆ける。

「――ッオラァァー!!」

「フンッ!」

示し合わせたかのようにお互い、頭目掛けて拳を振るう。狙うのは、意識を奪う事を目的――つまり顎先。

ナギの身体強化がラカンの身体強化に勝ったのか、或いは単純に体重が軽い分ナギが素早かったのか――ほんの一瞬だけ早く、ゴシャァ……と、およそ人体から聞こえてはいけない音を鳴らしつつ、ナギの拳がラカンへと突き刺さる。

ほぼ同時、しかし一瞬遅れてナギの顔面へとラカンの拳が届き、あまりの衝撃にナギは大きく吹き飛ばされる。

（チツ……ちよつとずらされたか。南で最強つてのは本当らしいな！）

（ハッ、俺より速いか……先に殴られて勢い落ちた分、威力が出なかったな。殴った感触が軽い）

一度始まった以上、今更距離が開こうとも攻撃あるのみ。
その開いた距離すらも利用し、攻撃を仕掛ける為の布石として両者は動く。

「コレならどうだ！？ 精霊召喚、我が写し身たる戦友23柱——
敵を叩きのめせ！」

「うおつ、分身か？ まるでニンジャみてえだなオイ！」

自身が瞬間的に出せる最大数の精霊を放ち、四方八方から攻撃を行う——その数はナギ本人を含めて24。

ナギ本人には劣るモノの、その馬鹿げた魔力を使って使役される精霊は一騎当千とまでは言えないものの、ラカンを梃子搦らせる程度には有効だった。

……しかし、それは『身体強化しか行っていない』ラカンが相手ならである。

面倒臭い、の一言と共に腕を一閃……気合と根性と腕力と気合、そして気合による力技で、周囲を纏めて薙ぎ払う。明らかに動作と結果が釣り合っていないのだが、バグキヤラは大体こんなモノなので仕方ない。

周辺の地面ごと、纏めて吹き飛ばされたナギの分身はその力を失い、次々と消えていく。

最後に残ったのは、先ほどの攻撃の余波を受けた所為か、杖を持ったまま吹っ飛んでいるナギ。

「オイオイ、無防備じゃねえか……意外と呆気無いな、最強の魔法使い!!」

言うや否や、瞬動を用いて急接近。
勝利を確信し、最後の1人へと気を込めた拳を思いっきり振り降ろす。

殴られたナギは防御する事も出来ず凄まじい勢いで吹き飛び、1回……2回……3回と地面で大きく跳ねる。

最後の締めにはズザザザーと砂埃を撒き散らしながら十数メートル滑り、全身から力が抜けた様に倒れる。

……そして、ポンツと軽い音と共に煙となって消えた。杖を残して。

「——んなつ、罔ツ?!」

驚愕に目を開くラカンが遠く離れた所からナギの声が聞こえた時には、既に避ける程の時間は無い。

……そもそも、ナギも多少時間があつた所で避けられる魔法を撃

つ積りも無い。その呪文はナギが必殺の一撃として好む――

「――広域殲滅用の大呪文か?! 杖も無しで!」

「今更気付いても遅エ! 避けられるなら避けてみやがれ――千の雷イツ!」

――と、そんな事があつてから十数時間。

ナギとラカンが戦闘を開始してから既に一度日が沈み……そろそろ朝である。

お互いに魔力やら気が尽きたのか、身体強化も無しに殴り合っていた。

「ハア、ハア……オイおっさん、拳が軽くなつてんぞ。そろそろ限界かア?」

「フン……テメ、息上がつてるじゃねえか。お前こそ限界だろ?」

身体強化すら出来ない為、気功術や魔法の応酬も無い。ついでに回避も無い。

お互いに殴っては転げ、そして起き上がっては殴りを繰り返していた。実に泥臭い。

全身ボロボロになっていながらも殴り合いを続けていたが、両者ついに気力が尽きたらしく、膝を付く。

「ハア、ハア……やるじゃねえか小僧。」

「あ、あんたこそな……まさか俺と互角にやり合える人間に会えるとは思って無かったぜ」

「ハッ、互角か……じゃあ、後2人もいるテメエらの勝ちって事か……くっそ、まさか負けるとは思って無かったぜ」

2人してゴロリと転がり、手足を投げだして大の字になる。
、疲労こそ全身に表れているが、両者共に「俺達、超楽しめました」的な表情を露わにし、充実感全開だ。……まあラカン若干悔しそうなのだが。

「俺もココで終わりか……ま、最後の最後でお前と戦えたんだ、満足して逝けるってもんだ」

「あ？ いきなり何言っただおっさん」

「俺はお前らを殺しに来た……で、俺はお前らに負けた。つまり、

俺は終わりってこった」

ラカンが語るのは、殺し屋（実際は傭兵だが）としては当然とも言える事。

殺しに行つて負けた、なら殺されるという事は当然の帰結である。常識的に考えて。

しかし、隣に居たヤツは常識を投げ捨てる者^{バカ}だった。

「ん？ ……………じゃあ俺らの仲間になれよおっさん」

「…………お前、何言ってるか解ってるか？ 俺はお前らを殺しに来たんだぜ——さっきも言ったけど、これ重要だからな？」

「そんな事知るかよ。じゃあアレだ、アンタは俺に負けた、だからアンタの命は俺の自由。んで、俺の言う事を聞く。俺はアンタに仲間になれって命令する。どうだ完璧だろ？」

「いや…………どうだと言われてもな？」

「まだ納得しねえのかよ…………じゃあ、アンタの命は俺のモノだから、その命を代金としてアンタを雇うつてのはどうだ？ 傭兵なんだからおっさん」

—— 完 全 理 論 武 装 ——

とでも言いたげな顔で語るナギ。間違つては居ない。確かに間違

つては居ないのだが、普通言わない事である。幸か不幸かナギは普通じゃないので言ってしまったが。

ラカンも脳筋とは云え、奴隷剣闘士として、その後は傭兵としてシビアナ世界を生き抜いてきた男である。死ぬよりはマシなので確かに美味しい話ではあるのだが、流石にソレはどうよ？という気がしなくもない。

しかし、それもナギの次の言葉までだった。

「っていつかさ、またあんたと遣り合いたいんだよ……実力が並んでるから良い戦いになるし」

「よし、それなら仲間になっても仕方ないな」

ラカン即答。

バトルジャンキー故に致し方無し。

呟くように付足された「……御師匠に勝てる気はしないし」という言葉を聞き、ただだけ強いんだよあの白髪のカキ。などと冷や汗を流したりしたのは御愛嬌である。

「ふむ……つまり其処の筋肉を仲間として連れて行く、ということじゃな」

「フフフ……2人とも似た者同士バカですから、何所か通じ合う所があったのでしょ」

「………なんか、俺の負担が増える気がするんだが……」

話しかけるのは紅き翼3名。流石に詠春も十時間すれば気絶から覚める。

まあ気が付いたら周りの風景が変わっていて、さらに襲いかかって来た敵が仲間になろうとしている。意味が解らない。頭が可笑しくなつて死ぬ。

後に彼は語る「ナギで慣れていなければ心労で即死だった」と。

「苦勞するお父さん、といった感じですね詠春？」

「誰がお父さんだ、誰が」

「お父さん負ぶつてくれ。動けねえんだ」

「だからお父さんじゃないって言ってるだろ！……まあ、仕方ないから負ぶつてやる」

「確りお父さんしておるでは無いか」

詠春がナギを背負い、馬鹿話しながら歩き始める。

そもそも彼らウェスペルタイア王国とヘラス帝国の国境付近に居たのは、帝国兵を帝国まで確実に追い返す為である。つまり、追い返した以上はさつさと報告に帰る必要があつた。

……これに焦つたのは、他でも無い。彼らの背後で死んでるラカンである。

「おいコラテメエ……ナギ・スプリングフィールド、俺を置いていくんじゃねえ！ 何一人だけ背負われてんだ、ずりいぞ……！」

「ココまで来て見やがれ筋肉ダルマあ！」

「……ッ！ 耳元で騒ぐな！ 頭に響く……落としてやろうかこの馬鹿」

「すみませんでしたお父さん」

「そのネタは止めろオ！」

—— side ラカン

「で、結局俺はどうすりゃ良いんだよ？」

あいつらが「お父さん」と言い合いを繰り返して暫く立つたんだが……いい加減、転がったまま放置されるのは辛い。

何が辛いって、忘れられてる気がして辛い。流石の俺も泣くぜ？

「あー、じゃあアルが背負えば良いんじゃないかな？」

「私は純粹な魔法使いですよ、あんな筋肉の塊持てる訳無いでしょう……貴方とは違うんです」

そりゃ御尤も。

つつーか、魔法と格闘両方こなす赤毛がブツ壊れてるだけで、普通はそうだよな。

「アルは駄目か。じゃあ御師匠は？」

「ふむ……まあ良からう。今回だけじゃからな」

「流石は御師匠だぜ、良かったなー運べる人が居て」

なるほど、俺はあの白髪のがきに運ばれるのか。

でもコイツ、最近加わったメンバーらしくて情報無いんだよな。

「……言っちゃ何だが、本当に俺を運べるのか？ その白髪のがきは」

——ピシッ

空気が凍った。

何だ、何かヤベエ気がする。

白髪のがきが俯いてプルプル震えてた。凄いやバイ。全身から殺気……いやこれは怒気か？ なんかすげえ溢れてやがる。

なんだ、何でこんな怒ってるんだ？ 俺、何かやらかした？

——ガシッ

脚を掴まれる。

「御主、身体の丈夫さには自信があるんじゃない？ ……………引き摺っても構わんよな」

「——ッ！！（コクコク）」

やばいマジやばい。何か本当にやばい。頷くしかない。

引き摺られたら痛いなーとか、握力やべえ足首砕かれそうとか思っただけど黙るしかない。何か口開いたら余計に面倒な事になる気がした。

そんな事を思ってる時だった、胡散臭い声が聞こえてきた。

《……………ジャック・ラカン、聞こえますか？》

《あ、ああ……………聞こえてるよ。あんたは……………アルビレオだったか？》

《ええ、アルビレオ・イマと言います。気軽にアルと呼んでくれて構いません……………ああ、それどころじゃありませんでしたね》

胡散臭いが、どこかシリアスな感じで念話を交わす。

何故か、この話だけは絶対に聞き逃してはいけない……そんな気がしたからだ。

《良いですか、一度しか言わないですから良く聞いてくださいよ？
今貴方を引き摺っているのはフィリウス・ゼクト……見た目こそ少年ですが、実際は極めて長い年月を生きた賢者のような存在です》

へー、そりゃ知らなかった。

……だが、それが今のこの惨状に何の関係があるんだ？

《………それですね、ゼクトは子供扱いされる事を極端に嫌います。悪意さえ籠って無ければ我慢しているのですが………今回は久しぶりに言われた様で、沸点が低くなっていた様です》

《あ、ああ………解った。つまりガキ扱いしなければ良い——ッ！
！》

「……………何じゃ？」

脚を握る力を強くしやがった……こいつ、どんだけ握力強いんだよ！ つつか、念話を読みとったのか？！ 今のはガキ扱いして無いからノーカンだろ？！ （ギリッ） ——ッ！！！！

そついや、さっき赤毛が勝てる気がしないって言ってたな。それってこういう事だったんだろうか？

………そんな事を思いつつ、俺の意識は落ちた。

く 観戦者達の憂鬱 く

ナギとラカンのダブル馬鹿が

「千の雷」（バリバリバリ）

「気合防御」（ズガガガガ）

………などやっていた頃。

少し離れた小高い丘（戦闘の余波で崖になった）の上に居たゼクトとアルは「好きにやれ」と言った事を後悔していた……特にゼクト。

彼が今までに出会った、あるいは知識として知っているバグキヤラは結構多いのだが、戦闘能力に秀でたバグキヤラ同士が戦うといった事態は起こらなかった。

精々バグった際に感情が爆発し、暴れ回る者が居た程度である……
… 勿論、即鎮圧し、治療も施したが。

「あいつ等、加減と言うモノを知らんのか……森が消し飛び、地形

が変わったぞ」

「……正直、私も見くびっていました。まさかバグキャラ同士が戦うとココまで被害が拡大するとは……」

語り合う2人には、どこか哀愁が漂っていた。

どこか、と言うよりも全身から溢れ出ていると言った方が良いかもしれない。それ程までに後悔しているのだ。

ちなみに詠春は、例の精霊達4人——ちゃんと服ローブを着ている、ゼクトとアルが渡した——に介抱されている。役得だが、意識が無い詠春が知る事は無い。

それどころか、後日この時の後継を収めた写真をアルが取り出し、からかわれたりしたのでむしろ大損である。

第3話 2人はバグキャラ！ MAX/HEAT（後書き）

このSSのゼクトは怒らせるとヤバイです。

でも殺しはしません。それが彼の流儀。

ついでに、余裕でナギより強いです。魔法でゼクトに勝てる奴は殆ど居ないのがこのSS。

ちなみにジジイ口調なのも、子供扱いされないようにするための一環だったり。

第4話 「ナギですが、出撃先の空気が最悪です」（前書き）

大分裂戦争時代は原作単行本に話が殆ど載って無いので書き辛いですね！

まあ、ココのゼクトさんは魔改造済みというか、根本から設定が原作と違うハズなので原作通りとか丸めてホムーランですが。

第4話 「ナギですが、出撃先の空気が最悪です」

結局、筋肉達磨ことジャック・ラカンが仲間となり、紅き翼は4+1人となった。

「それって5人じゃねーの？」と思われるかもしれないが、違うのである。

なぜならば、ゼクトは紅き翼に入ってるつもりが無いからである。協力者か、あるいは特別顧問とかそんな感じである。

…… 勿論そう思っているのは本人だけなので、メセンブリーナ連合からは手駒扱いされているわけ。

「おのれ連合、ワシをこんな所に行かせおって…… ワシが居ない間に王国が落ちたらどうするつもりじゃ。…… まさかそれが目的か？ だとしたら連合を潰さなくては…… 死者などは出さんよ、死者はな…… ブツブツブツブツ」

「フフフフ…… その時には御一緒にさせていただきますよゼクト。いえ、王国が落ちる前に連合を潰すべきですかね？ 勿論死者はゼロで」

「（ブツブツブツ）」 「フフフフフ……」

（やべえ、なんか御師匠の機嫌が滅茶苦茶悪い！ アルもいつもより変だ！）

ゼクトが不機嫌になり、アルビレオも機嫌が悪い。

ラカンには気にせず己を鍛え、詠春は既に割り切ったのか愛刀の手入れに精を出す。

何とも珍しい事に、ナギだけが貧乏くじを引いたような状況となっていた。

ここはウェスperlタイア王国の南、アルギュー大平原。

ヴァルカンの南東方面に位置するヘラス帝国との国境付近である。メセンブリーナ連合軍上層部の考えでは、帝国軍がこのアルギュー大平原を通って侵攻してくるだろうという予測らしい。なんでも、広域殲滅魔法『千の雷』を扱えるナギと『紅き翼』なら広大な平原を抜けようとする艦隊等を止められる、あるいは牽制になるだろう……とか何とか。

この指令を受けた際、やはりゼクトは「何故ワシまで数に含まれておるんじゃ?！」と理不尽に対して抗ってみたり、アルビレオが「まだオステイア市街を見て無かったんですが……」と残念そうに呟いていたり、実に混沌としていた。

ちなみに、この時一番マトモな思考をしていたのは詠春で「やっぱり連合陣営なのに、ヘラス人が加わったから左遷されたのかなー」と、実に理性的な反応をしていた。

……ナギ? ナギは元から特に考えてなど無い。ラカンに至っては話を聞いていないという酷さである。

余談だが、彼らが来た頃こそ帝国軍艦隊が来たりしていたものの、最近ではこの付近を通って侵攻をして来る事は無い。

流石に『紅き翼』が居る事で通行不能と判断したのか、別にアルギュー地方を完全に帝国の勢力圏にする必要が無いと判断したのか。

まあ、それはヘラス帝国の軍部のみが知る事である。

……さらに余談だが、ウェスペルタイア王国の東部に位置するシルチス亜大陸は『紅き翼』が王国付近に居た頃の活躍により、その半分ほどが連合の勢力下となっていたのだが。

実に残念な事に、帝国の侵攻によって実にあっさりと取り返され、戦線は王国との国境線付近まで戻っていた。

これもまた、ゼクトがイライラしている理由の一つである。

side ナギ

俺達は、このアルギュレー大平原を侵攻しようとする帝国軍の足止めを任されていた。たったの5人でこの広大な平原を防衛しろ、って言うんだから相当期待されてるって事だよな。

でもココ暫く帝国の侵攻が無い。一週間ぐらい無いんじゃないか？アルギュレー大平原北部にある都市、ヴァルカンで補給しては平原で敵を探す日々。ぶっちゃけ暇だ。

最初の頃は結構な頻度で帝国艦隊を見かけたから、ラカンと競う様に戦艦を落としてただけだな……ちなみに俺の圧勝だ。流石にラカンが気弾で戦艦を吹っ飛ばした時は驚いたが、流石に疲れるらしい。3〜4隻程沈めたら気弾を使わずに素手で殴りに行つてたな。まあ、ラカンが戦艦に近付くより俺の魔法が届く方が速いから、俺

の方が多く戦艦を落とした。俺の方が多く落とした、これ大事。

……でも最近は来ないから暇なんだよ。魔法も全然使ってねーし。移動くらいじゃね？ 時々ラカンとの殴り合いで『身体強化』『魔法の射手』くらいなら使ってるが、それ以外は使って無い。『雷の暴風』とか、中級以上の魔法は地形が変わるからって詠春と御師匠に禁止された。

そこで俺は閃いた、デカイ魔法を撃っても怒られない方法を！！俺凄くね、天才なんじゃね？

「って訳で、俺に稽古を付けてくれ御師匠！！」

「……唐突過ぎて如何言う訳だかさっぱりなんじゃが……まあ良いか」

ふっふっふ……その方法とはズバリ、御師匠に魔法を教えてもらう事！

これなら魔法を怒られずに使えるし、その上で強くなれる。まさに一石二鳥！

御師匠の魔法は構成とかが凄いからな、俺も中々だと思っんだが……次元が違っぜ。

さあ最初は何だ？ この間、帝国軍を追いかけてた時に使ってた『雷の投擲』に似たヤツとか教えてくれっかな？

「ふむ……御主は大雑把な魔法ばかりじゃしな、座学を交えつつ

基礎を教えるのでしょうか。基礎と知識は大事、まさに真理」

……あれ？

「おや、ナギに魔法を教えるのですか？」

「アルか……よし、御主も手伝え。どうせ暇なんじゃろ？」

「ええ、お供しますよゼクト……フフ、いつかナギにはちゃんとした魔法理論を教えてみたかったですよ。いい加減にやってアレですからね、完全に知識を身につければ……実に楽しみですね？」

「そうじゃな——さて、逃げてくれるなよ……ナギ？」

やっべ、墓穴掘ったかもしれねー！

—— s i d e e n d

アルギユレー大平原のド真中。今ココに魔法使い達が「世界一受けたい授業」が開催されてた。

その名も『ゼクトとアルの青空魔法教室』基礎理論編』である。

名前からしてナギが全力で逃げそうなモノではあるが、気付いた

時にはアルビレオの重力魔法で地面に縫い付けられ、残念ながらナギは授業を受けるしかない。現在は机という名の卓袱台の上に愛用のアンチヨコと鉛筆を置き、授業に耳を傾けるしか無かった。

しかも正座なので、脚がモノ凄いい痺れているのだが……ゼクトとアルビレオはスルーである。容赦無い。むしろ痺れたままの方が精神修行になるんじゃないの、とでも言いかねない。

そして今、ナギの目の前に置かれた黒板には、真っ白なチョークによってデカデカと授業内容が書かれていた。その驚愕の内容とは――

第01回、魔法講座　～呪文詠唱って何？～

――である。

基礎にも程がある。しかも『第01回』と書いてある辺り10回以上やるつもりなのだろうか。ナギは心の中で滝の様に涙を流した。とりあえず不満そうな顔をしつつも確りと鉛筆を持ち、開いたページに『01、呪文詠唱について』と書いている辺り、一応授業はちゃんと受けるつもりらしい。

……多分、いや確実にナギが中退したメルディア魔法学校の教師達がこの光景を見たら……教鞭を振るう2人を神と崇めただろう。

ちなみに、ナギの目の前に置かれている卓袱台も黒板も……どちらもゼクトの影から取り出された代物である。

なんでそんなモノが入っているのか、それは極一部の者だけが知る超機密情報なのでココで語る事は出来ない。

「さて――今回の内容はズバリ、魔法使用時における呪文詠唱についてじゃな」

「黒板に書いてありますけどね……というか、最初にコレを教えてくださいまうんですか？ 確かに基礎ですが……流石に早過ぎる気が」

「何、基礎は大事じゃろ……それにこの馬鹿、教えられても無いのに使っておったしのう。遅かれ速かれ気付いたとおもっぞ」

何やら始まるゼクトとアルビレオの不穏な会話。

良く解らないが、とりあえずナギは話を聞く事にした。アルビレオの言い方から察するに、何やら授業名の割りには『奥義』的なナニを教えてもらえる気がしたからだ。

「早速じゃがナギ、呪文の詠唱とは何か……解るかのう？」

「呪文詠唱……あー、魔法を使う為に必要な儀式とかそんなんだろ？ 細かい事は知らねーけど、流石に中退の俺だってソレ位は知ってるぜ」

最初の問題は呪文詠唱について……色々な意味で基礎中の基礎である。魔法学校で習う内容としては「呪文とは魔法を行使する際の一種の『言霊』であり、精霊達に意思を伝える儀式である」といった様な事を習う。……なんと驚く事にナギは覚えていたらしい。

恐らくその頃はまだ魔法を学び始めたばかりで、確りと聞いていたのだろう……と思いつつ、ゼクトは30点という赤点で即死な評価を心の内で下す。魔法学校基準ではなくゼクト基準で点を付けるとこんなモノである。

「必要な儀式か……ふむ、では無詠唱での魔法行使はどうなる？」

「えっと、無詠唱は……ノリと勢いじゃね？」

「……0点じゃな」

ちなみに魔法学校の教科書には無詠唱呪文なぞ載っていない。高等技術なので専門書でも読まないと学ぶ事が出来ないのである。ちなみにナギは自分で言った通り、ノリと勢いで使う。まさにバグキヤラ。

「では最後に……始動キーとは何か、解るかの？」

「始動キー？……あー、プラクテなんとかって奴か。あれ何なんだろうな、別に言わなくても魔法撃てるし」

「御主、自分の始動キーも考えて無かったのか……」

流石にゼクトも、まさかナギが始動キーを持ってない事には驚いた。

とは言え、ぶっちゃけゼクト自身も、隣にいるアルビレオも始動キーなぞ無いので人の事を言えないのだが。

ナギの知識不足が余りにもひどいのでゼクトとアルビレオはぐんやりしていたが、「まあ、知らなくても別に良いか……」とすぐに持ち直す。

何はともあれ、一通りの質問を終えて事前知識を確認したゼクトは話を進める。ここからが、今回の授業の本題であった。

「さて、では話を戻そうかの。今までの質問で……まあ色々と御主の知識がアレだという事も解ったのじゃが……とりあえず無詠唱呪文という存在がある為に『詠唱は必要では無い』という事が解ったかの」

「あー、うん。何となく解った。呪文前半飛ばしたりしてもちゃんと使えるし」

「それだけ解つてれば十分かの。まあつまり、その魔法を使う為に必要な量の魔力さえ供給できるのなら、詠唱など必要無いという事じゃな」

ちなみに呪文の大半が古ラテン語や古ギリシヤ語なのは、西洋魔法の基礎を作った人々が「何か響きが魔法っぽかったから……」という理由で呪文を作ったからなのだが、これは言わなくて良いか……とゼクトとアルは思い、口にしなかった。全世界の魔法使いが知ったらそんなハズは無いと激怒するか、或いは卒倒するだろう。

「ま、つまり魔法を使う上で最も重要なのはイメージじゃよ。呪文というモノはそのイメージを固める為に自分自身に聞かせる言葉に過ぎぬし、始動キーも自分自身に対する『今から魔法を使うぞ』という暗示でしかない。始動キーを定める儀式は術者に対してその暗示を効きやすくするモノじゃな」

「ちなみに私の重力魔法はオリジナルなんですが、そもそも呪文がありません」

「へー、通りで見た事無い魔法な訳だ」

ナギは世界の真理へと近づいた！

しかし馬鹿なので忘れる可能性は高い。アンチヨコにはちゃんと書き残しているので、何時の日か読み返せば思い出すかもしれないが。

「そうじゃな、最後の締めにも魔法を見せてやるかの。今日のおさらいじゃ、良く見ておくんじゃぞ……アル、重力魔法を解除してやれ」

「了解です……ナギ、脚は大丈夫ですか？」

「ちよつ、おい！……脚痺れて——ッるんだから、つつくの止めるッ！」

「……おや、早速無詠唱で治癒ですか。流石ナギ、追い込まれると覚えますね」

どうやらアルビレオに痺れた脚をつつかれるという危機に陥ったナギは、咄嗟に治癒魔法を無詠唱で発動させたらしい。まさに高等技術の無駄遣い。

そんな2人を後目に、ゼクトは黒板や卓袱台といった小道具を影

（という名の何所か良く解らない場所）へと片付けて準備を終わらせる。

「準備は良いかナギ、今から見せるのが今日の講義の集大成じゃ」

「解ったぜ御師匠。何時でも良いぜ……その魔法、見せてくれ！」

何か良く解らないが『集大成』という単語から『何かスゲー魔法』という事を悟ったナギはゼクトへと視線を向ける。そして、ゼクトはナギへ背を向ると人差し指を自身の正面へと向け……呪文詠唱を始めた。

「では行くぞ？ …… ものみな焼き尽くす浄北の炎、破壊の王にして再生の徴よ。我が手に宿りて敵を喰らえ—— 紅き焰ッ！」

「詠唱したら今日の授業内容と全然関係が——うおっ、凄え！？」

確かに、今日の講義の内容は『呪文不要』である。故に、ゼクトが呪文詠唱し始めた事で「言ってた事とやってる事が違い！」と流石に混乱したナギだったが、その魔法の効果を見て納得した。

ゼクトが指差していた方向……そこは巨大な氷柱が地面から突き出していた。

その魔法は『凍る大地』。どう見ても氷系統の魔法であり、間違っても『紅き焰』（高威力爆発魔法）では無かった。

これぞある種の無詠唱の極地、まさに『言ってる事とやってる事

が違っ』である。

……実は無詠唱魔法を放ちつつ、別の魔法も同時に扱えたりする。むしろそっちが本来の使用方法なのだが。

そもそも確かに高等技術だが、探せば使える魔法使いくらい何人か居るのであるう技法である。一応高等技術なので、使い手をナギが見た事が無かったただけである……が、初見のインパクトは確かに「何かスゲー」と感じるには十分であった。

「ははっ、何だよそれ！ 規模がデカいとか威力がスゲーとかじゃなくて、系統が既に違っじゃねーか！ やっぱ御師匠は凄えな！」

「おお、そうか？ そうやって褒められると結構嬉しいのう……では明日は何を教えようか」

「……え？」

「そうですねえ、パートナー契約でも教えますか？ 何か最近の魔法使いはポンポン契約してる様ですし」

「ふむ、じゃあそうするかの……ナギ、ワシらの授業が聞けるぞ、喜ぶと良い」

「……、ありがとうございます……（また墓穴掘ったー！？）」

ゼクトはニヤリと笑い、アルビレオはフフフフと胡散臭い笑みを浮かべる。

明日も教鞭を振るう気な2人を見て、ナギは己の迂闊さを嘆くの

であつた。

第4話 「ナギですが、出撃先の空気が最悪です」(後書き)

●ゼクトが帝国軍を追い立てた際に使った『雷の投擲』に似た奴超凄い密度の風属性『魔法の射手』。

相手を吹っ飛ばす事に関してはエゲツナイ性能を持つ。

あまりにも高密度故に半プラズマ化しており、その所為でナギは雷と勘違いしている。

次回、多分ガトウさん辺りが登場するかなー？

第5話 ゼクト先生のアーティファクト教室（前書き）

今回も説明回だぜひゃはー。

説明回は書いてて辛いです。何って、あまり面白く無い。それなら設定集を書いた方が数万倍面白いですー。

でも、次回から急展開できる。読者の皆様より自分が楽しみです。

あ、それと今回からSSのタイトルが変わります。というか変えました。

旧題：頑張れ女神さん。

新題：僕の母親は女神様なのです。

——となります。まあ、本編中には全く関係無いですね！

では、今回の話をどうぞ。

第5話 ゼクト先生のアーティファクト教室

ここは、ヴァルカンの南に位置する、名も無き小さな町。
普段は長閑な自然に囲まれた静かな町。

しかし現在は世界を2つに分けた戦争中、その連合と帝国の境界線に最も近い町であり、戦線維持の為に多くの兵士や傭兵が訪れ、補給物資が次々と運び込まれていた。

紅き翼の5人は、「今日も帝国来なかったぜー」などと呟きながらこの町の宿へと帰って行く。宿は全て連合名義で貸し切られており、連合陣営の兵士や傭兵は金銭を払う事無く利用できるのだ。

とは言っても、戦線を維持する為の人数を小さな町の宿が受け入れられるハズも無く。

兵士や傭兵達は眠る為だけに部屋を使い、交代で部屋を利用していた。

それに比べ、紅き翼は先日オスティアから帝国軍を小数で撃退した事で期待されているのか、一部屋まるまる貸し出されている。狭い部屋、扉を開いて正面に窓。両サイドには3段ベッドが置いてあるだけの質素な部屋ではあるが、6人部屋を5人で使える。

他の兵士達は寝る事にしか部屋を使えず、事実上20人前後で1部屋を使っているのだ。文句を言ったら罰が当たる——かもしれない。

まあ、ラカンだけは図体がデカすぎてベッドに収まらず、床で寝ていたりもするのだが。

「オーイ、おばちゃん。今日の飯まであとどれくらいだ？」

部屋がある二階へと上がる前、ラカンが一階の食堂で調理をしていた女性へと声を掛ける。

宿の女将……宿の機能も持つ酒場に近いかからマスターと呼んだ方が良いだろうか。

巨大な鍋をかきまわし、膨大な量の食材を切り刻み、熱せられた巨大鉄板の上で食材を炒める。同時にやらなきゃいけないのが、良く食う男共が泊る宿の料理人の辛いトコロだ。

「おっと、一番食う奴等が帰って来ちまったかい！ そうだね、あんたらの分まで用意するとなると……2、3時間くらい掛かるよ！」
「ほーん、じゃあそれくらいになったら降りてくるわ」

後ろ手を振りつつ「期待してるぜー」などと言いながらラカンは階段を上って行く。彼に好戦的とも言える笑みを浮かべる彼女は、今まで以上の速度で調理を続ける。

操影術を用いて鍋をかきまわし、操影術で食材を切り、自らの手で鉄板の上の食材を炒める。

—— その様はまるで人間食品加工所である。

彼女の名前はオバ・チャーン。冗談の様な名前だが本人曰く、本名であるらしい。……だが、実に偽名臭い。

仮に本名だとすれば、ひょっとすると先代の名前はオバア・チャーンとか、ババー・チャーンだったのかもしれない。

「実は、本人だけが知っている……」

「飯は2、3時間後だつてよ」

「そうかー。それまで何すつかなあ」

そう言つてラカンを迎えたのは、先に部屋へ向かつていた連中の1人……向かつて左側のベットの最上段、そこから首だけ出してゴロゴロしているナギである。

彼はこの部屋に泊まる事になった初日、真つ先にこの最上段へと登り「俺のベッドここな！」と宣言したのだった。その時、本人とラカンを除いた3名が微笑ましいモノを見るような顔をしてしまったのは仕方ない。生憎、その視線を向けられていた本人は気づいて無かったが。

「ふむ……ならば、パートナー契約でもしてみるかの？」

「……パートナー契約？」

そう呟いたのはナギ居る段のひとつ下……真中から顔を出すゼクトだった。

魔法戦闘におけるパートナーとは、魔法使いが呪文詠唱を行う際、その隙をカバーする為の『防波堤』としての役割を持つ。

この防波堤としての役割を主従関係という形で明確化、カードという形で物質的に象徴化し、霊的な繋がりによってブースト（魔力供給）、無音連絡（念話）、非常招集（召喚）を行えるようにする儀式である。

そして、契約に用いられた主側の魔力出力が高い場合、従者が扱うに最も相応しいであろうモノを選別、『アーティファクト』として使用可能にする超素敵な儀式なのだ。

このシステムを考案・設計し、基礎を組み上げた方は凄いのである。

———という感じなのじゃが、何故知らんのじゃ。割と有名じやろこの儀式……」

「いや、俺中退だし……あと、授業の大半は寝てたから」

「……むう。まあ兎に角、この契約を行えば魔力供給で従者を強化したり、何らかの道具が手に入る訳じゃな」

まあ、ナギは馬鹿だし仕方ないか。と無理やり納得し、ゼクトは話を進める。

都合良く、ココには紅き翼が全員揃っている。いつも何所かフラフラと出掛けている（恐らく、修行）ラカンも今なら居る。パート

ナー契約するなら今の内であつた。

「……と、言う訳で。ここに都合良く仮契約の陣を描いたスクロールが何枚がある。誰か参加する者はおるか？ 無論、ナギが主じやがの」

そう言つて影からズルリと取り出したのは1枚のスクロール。ゼクトが「何枚か」と言つた以上、影の中にはまだまだ入っているのだろう。

とりあえず、正面に居た詠春へと視線を向けてみる。

「うーん、身体強化というのは魔力によるものなんだろう？ だとすると俺とは相性が悪いだろうし……武器もコイツがあるしなあ」

だからパスで。そう言つて、愛用の野太刀『夕凧』の手入れを続ける。

確かに、氣と魔力は反発する為に詠春とは相性が悪い。現在の得物も中々の業物であり、むしろ他の道具が出てきても使い道が無い。慣れない武器程使い勝手が悪いモノは無いからだ。

まあ武器以外が出る可能性もあるし、そもそもアーティファクトとして夕凧が出る可能性もあるのだが。ゼクトとしては一度拒否をした相手にしつこく聞く氣は無い。

続いて、床に座り込んでいたラカンへと視線を向ける。

「あ、俺は参加するぜ？ 面白そうだしな」

即答だった。

コイツも詠春と同じく気で身体強化を行う者ではあるが、何とかなつてしまいそうな辺り頭が痛い。「とりあえず1名参加」と呟きつつ、馬鹿の相手をする和无駄に疲れる事を学習したゼクトは最後の1人、向かいのベットの最上段に居るアルへと視線を向けた。

「私も参加ですね。既にあのカードは死んでいますし」

「あのカードも死ぬのか…… まあ、良いか」

カードが死ぬって何だ？と尋ねるナギに、ゼクトは契約相手が死ぬと、契約カードの効果も消える事を教える。まあ、他にも契約更新を行わなかった場合にも仮契約カードが死んだり（期限切れ）するのだが。

…… アルビレオが持つカードは実は無期限だったりするので、これには当てはまらない。

この場合、以前契約した相手が死んだ、つまり霊的な繋がりが切れた（圏外）という事を示す。

「ではラカン、アルの2人じゃな？ …… 術式、解凍——」

ゼクトは契約のスクロールを床に置き、封じられた術式を展開する。

ポンツ、としょぼい音を立て、煙と共にスクロールは消滅し、代わりにギリギリ目に見えるか見えないか、といった程度の魔法陣が浮かび上がる。

これは昔、ゼクトと愉快的仲間達が作ったパートナー契約の魔法陣。

現代で主流である仮契約の魔法陣は効果期限があり、更新しなければ契約の効果が切れてしまう。しかし、この魔法陣では無期限で継続するのだ。

……その代わり、契約する両者が魔力や気のある程度使えなければならぬという条件があるが。

「——設置完了じゃ。ナギ、この魔法陣の上に立って魔力を流し込め」

「あいよー」

興味があつたのか、ゼクトが魔法陣を展開している間にベットから下りて来ていたナギは、言われるままに魔法陣の上へと移動し、魔力を流し込む。

色の薄かった魔法陣は、ナギの魔力に反応したのかハッキリと視認できる程に輝き、部屋を照らす。

「よし、もう良いじゃろ……次、ラカンも上に乗って魔力でも気でも良い、流し込め……ナギはラカンも乗れるように、少し端に詰めて……そう、それくらいで大丈夫じゃ」

続いて、ラカンの気が、魔法陣へと流し込まれる。
すると魔法陣から漏れる光はフラッシュの様に一瞬強くなり、そして消失した。

そこに残るのは、2枚のカード。主であるナギ用（控え）と、従者となったラカン用である、

大きな剣を持った、筋肉のオッサンが描かれたカード。

……正直、ラカンファン以外は欲しく無いだろう。一目見ただけでむせる。

「お、中々カッコ良く描かれてるじゃねえか俺……まあ、本物の方が万倍カッコ良いけどな！　ところで、この描いてある剣がアーティファクトとやらなのか？」

「まあ、焦るな。アルの分も契約してから説明するからの」

ラカンに説明をしながらも、ゼクトは次の魔法陣を展開する。

先程と同じ魔法陣……今度は、アルビレオの分である。

勝手知ったる何とやら、準備完了と言われたナギは素早く魔法陣に乗り、魔力を流し込む。やはり、先程と同じく魔法陣は光り輝き始め、続いてアルビレオが魔力を流し込み……出現するのは、当然主従一対のカード。

「ふむ……やはりアーティファクトはコレになりますか」

「『イノチノシヘン』か……まあ、御主専用みたいなモノじゃな……出てくるのはある種当然、といったところかの」

描かれているのは、多くの本に囲まれたアルビレオ。

その絵柄と描かれた本は、アルビレオとゼクトにとっては既知の存在だった。

何せ、アルビレオにとってはかつて使っていた愛用品であり……その当時、ゼクトも見ているからだ。勿論、アーティファクトとしての効果も熟知している。

もしかすると、外見そっくりな別モノである可能性もあるのだが。

「なあ、話し込むのは良いんだが。俺の方のカードはどうなんだ？
アーティファクトとやらの出し方も知らねーしょ」

「では、外で続きを説明しようかの……アルの方は兎も角として、御主の方は見るからに部屋で出す訳にはいかんじやろ」

ラカンの言葉を合図に、一行は外へと出る。

彼らの部屋は二階の廊下の奥、突き当たりの部屋だ。扉を出て真直ぐ進んで階段を降りる。

一階に降りた所で、調理を続けるおばちゃんに直ぐ戻る事を伝え、南へと進んで村から出る。小さな村なので、少し歩けば外に出る事ができた。

現在、眼の前に広がっているのはアルギュレー大平原。なだらかな地形が広がる場所だ。

ここならば、割と何をやらかしても問題は無い。何より、他に人が居れば気付く事が出来る。

「ここならば問題ないじゃろ……ではアーティファクトのお披露目じゃな、『来れ』と唱えれば出る」

言われるまま『来れ』と唱えると、アルビレオの手元に一冊の本が出現する。

……が、ラカンの手元には何も出現しない。
否、『取扱説明書』と描かれた紙があった。

—— 取扱説明書曰く「己が武具を願え。さすれば与えられん」

正直、ラカンには意味が解らなかった。

だが、それを見たゼクトは理解したらしい。

つまり、読んで字の如く。

「何か欲しい武器をイメージしながら『来れ』と唱えれば良いんじゃないかの」

「欲しい武器ね……やっぱアレか？ いや、アレも捨てがたい……
そっぴや前に見たアレは良かったな……まあ良いか、『来れ』！
！」

ラカンがイメージするのは、かつてその目にした数々の刀剣。
それは、剣闘士時代に使用していた得物。

それは、相対した敵が持っていた武器。

ついでに武器屋に行った際、手持ちが足りずに買えなかった業物の大剣。

おまけで気紛れに潜った遺跡で、ガーゴイルが持っていた可変する対刃剣。

とりあえず、何かイメージしておけば出るらしいので見知っている武器を片っ端からイメージして唱えてみた。

その結果が、周囲に散らばる膨大な量の剣、剣、剣、鎚、剣、鎚、剣、何か良く解らないモノ、剣、剣、大太刀、剣、弩、ぱんつ、鋸、斧、靴下——そして剣。

想像した武器を創造する——それこそが、ラカンのアーティファクト『千の顔を持つ英雄』の効果。

これと言った形を持たず、現状に合わせて形状・サイズ・重量を想いのままに可変させる至高の武器。

バグってるナギと、バグってるラカンの合わせ技により顕現した、チートアーティファクトである。

「おー、この剣欲しかったヤツだよ！ いやー、あの頃は奴隷解放されたばかりで殆ど金が無かったからなあ……懐かしいねえ」

「ちよっ……これ夕風か？！ 形状といい、持った感じといい……本物と相違無いな。俺の手元にもちゃんとある……という事は、召喚している訳では無いのか」

「剣に斧……刃物という制限も無く、鎚もアリか……下着？なぜこんな物まであるんじゃ？！」

「ラカンのアーティファクトは武器？を創りだす効果か……アルのアーティファクトはどうなんだ？」

「ふむ、では私も……『来れ』」

ナギに催促されるまま、アルビレオはアーティファクトを召喚する。

すると、手元に無地の一冊の本が出現した。この本がアルビレオのアーティファクト、『イノチノシヘン』だ。

「む、一冊？ 新規契約で初期化されたかの」

「どうやらそのようですね……あの方々の書があれば戦い易かったのですが……まあ、良いでしょう。折角なので、現状メンバーで登録しておくしましょう。ナギ、貴方もこのアーティファクトの効果が見たいのでしょうか？」

「おう、早く見せてくれよ。ただの白紙の本って訳じゃないんだろ？ まさか殴ると痛いとかでも無いだろ？」

確かに、ハードカバーの白い本で殴られたらさぞかし痛いだろう。……が、そんな事する前に魔法を撃った方が早いし強い。

「では……汝、ナギ・スプリングフィールド。私にその『力』の一端を貸す事を承諾しますか？」

「いや、そんな事言われても解んねーし……どうすりゃ良いんだ？」

そう言つて、アルビレオは手に持った白い本をナギへ差し出す。
突然そんな事を言われた為に割と混乱したナギは、どうすれば良いのか解らない。

差し出された本とアルビレオの顔、2つの間を視線が行ったり来たりしている。稀にゼクトの方にも視線を向けて、助けを求める様な表情をした。

そんなナギを見て、ふふつと小さく笑みを浮かべたアルビレオは、祝詞とも取れる宣誓の文を続ける。

「——承諾するのならば、この書に手を。そして、魔力を」

「なるほど、この本に魔力流せば良いんだな。そんな位なら楽勝だぜ！」

結局、何が起きるのかは解らないまま、言われるままにナギは白い本に手を置き、魔力を流し込む。

……すると、魔力に反応したかの様に本に色が付き、まるで十数年の時を経たかの様な風合の本に変わった。

「——契約、完了。是、半生の書……『ナギ・スプリングファイールド』也。……っふう、お疲れ様です。これで準備完了です」

「ふーん、結局何だったか解んねーんだが。何かその色が変わった本で何かできるのか？ 俺の本とか言ってたけど」

「そう急かさなくてもお見せしますよ」

そう言つて、アルビレオは何所からともなく無地の栞を取り出す。この栞もまた、彼のアーティファクトの一部であり、魔力を流し込む事で効果を發揮する。

魔力を流し込まれた栞は薄らと光を放ち——アルビレオは、その栞を先程の本に挟み込み……勢いよく引き抜ぬいた。

引き抜かれた栞は、その先端を擦られたマッチの様に燃やした。
その灯は命の炎の様に燃え盛る。或いは、この栞こそが命の紙片と
イノチノシヘン
言えるのかもしれない。

「では——ッ」

「うおっ、まぶし……………おいアル、いきなり何しやが……………お、俺え！？」

数秒間燃え盛った栞は閃光弾にも劣らぬ光を放ち、その光が消える。

突然の光にやられたナギは文句を言いつつ、案外あっさり回復した眼をアルビレオへと向ける……………が、其処に居たのはアルビレオでは無く、ナギだった。

イノチノシヘン、それは他者の外見の模倣。

身長や体重等、諸々の物理法則を無視する似姿。
幻術では無く、その身体能力そのものをコピーする能力

「——これが、私のアーティファクト『イノチノシヘン』の能力です」

「ぶつ、ナギが丁寧語喋ってやがる……！」

「自分の顔相手に喋るってのは何か気味悪いな……ところで、コピーって事は俺位強いって事なのか？ だったら訓練相手に丁度良いんだけどよ」

「いえ、このアーティファクトの能力は身体能力の再現なので。残念ながら魔力関係や技術は元の私と変わらないですよ。身体に左右される『気』なら影響するのですがね」

「ちえつ、見回りの時の暇つぶし相手が出来たと思ったのによ」

試しに、外見ナギとなったアルビレオは魔法の射手等を放ってみせる。

その属性は雷で、確かにナギも使用可能な魔法ではある……が、術式の錬度が明らかに違った。ナギの魔力任せな無茶苦茶な構成では無く。ゼクト程では無いにしろ、緻密に練られたその構成は確かにアルビレオの物だった。

「……つとまあ、この様に魔法に関しては元の私の実力に左右されるのですよ。ですから魔力量も私のままでして……それから得意属

性も変わってしまいますので、ナギに変身している間は重力魔法が殆ど使えませんね」

「なんつーか……弱くなつてね？」

「ええ。大体弱くなりますね——それに、こうして時間制限付きでして。自分より魔力や気が多い相手への変身は特に時間が短くなってしまうのですよ」

喋っている途中でアルビレオの身体が元に戻る。

気づいたら元に戻っている。眼の前に居たナギですらその変化の瞬間は捕らえられなかった。ある意味、アハ体験できる光景だろう。絶対に知覚できないのだが。

「じゃあ、そのアーティファクトは結構使えねー効果つて事か？」

「いえ、使い方によつては強力ですよ。そうですね……例えば、詠春になれば神鳴流は使えませんが、高速の瞬動術等が使えますし、ラカンになれば重い物でも振りまわす事が出来ます。それに気が使える様になるので、ラカンの様に圧倒的な気の出力で周囲を吹き飛ばしたりなども出来ます……流石にアーティファクトまでは真似できませんが。そして慣れさえすれば、ナギの得意魔法である『雷の斧』や『千の雷』といった強力な魔法も使えるでしょう。現に、かつて私は水や炎の高級呪文が使えました……まあ、今は書が無いので使えないのですがね」

「あー、つまり練習すれば強くなるって事か。じゃあいつか相手してくれよ、自分自身と戦うなんて滅多にできねーしな」

「ふむ、己を見直すには良いかもしれない……アル、後で俺の本も作ってくれないか」

「じゃあ俺もやってくれよ。面白そうだしなー」

詠春とラカンも折角なのでアルビレオに頼み込む。

自分自身と戦う事が出来る魔法具等は実在するだろう。例えば、自身を複製して作った人工精霊等だ。コレと精神空間で戦えば、それはまさしく自己との戦いになるだろう。

……が、如何せん製作何度が高いし、紅き翼連中程の実力者になると本物と比較した際、人工精霊の劣化が激しい。

それに比べてアルビレオに頼めば、もしかすると自分自身……それも、少し違った戦闘方法を使ったりなどする相手と戦えるのだ。ほぼ同じ身体能力で、技能だけが違う。それは戦いの中で自己を見つめ直すという点においては中々良い機会だろう。

「……じゃが『半生の書』は名の通り、その人物のこれまでの人生を綴った書物じゃぞ。アルも人に言い触らしたり等はしないじやろうが、人の人生を見るのが趣味じゃから……まあ、弄る際のネタにされるくらいしか実害は無いがの」

「マジか、俺様の最強伝説が史実通りに書籍化かよ……胸が熱くなるな」

「え？　じゃああの本、俺の数々の武勇伝が載ってんの？」

「それは……いや、人に言い触らされ無いなら良いのか……？」

『半生の書』の内容に口々に感想を言う。ラカンとナギは馬鹿だからか、都合の良い事しか考えていない……詠春は少し悩んでいるモノの、やはり『自己との対面』という精神修行には欠かせないであろう物に惹かれていた。

そもそも、紅き翼のメンバーはそれぞれ身体的には既に完成系と言って良かった。後は技量や精神修行、そして経験（特にナギ）を積む事でしか殆ど成長は見込めないであろう。

……結局、アルビレオによる謎のセールストークによって2人共『半生の書』を作った。

以降、これにより詠春が色々と弄られる事になるのだが……今の彼は知らない。

つい乗せられて書を作ってしまったが、良かったのだろうか。

若干後悔しつつ、詠春は他の連中が食堂へ向かうのを追いかけて行くのであった。

「え、ラカンですか？ 意外と普通……というか、特に面白みのある内容でもありませんでしたよ。全く、弄るネタは手に入っても、その手段が無いのだから困ったものです」

第5話 ゼクト先生のアーティファクト教室（後書き）

） 元気に捏造設定 ）

●ゼクト式『パートナー契約儀式魔法陣』

粘膜接触や血液混合薬無しで契約が可能な素敵な儀式。

その代わり、両者が魔力や気といったエネルギーを体外に流す事が可能でなければならない。その都合上、どちらか片方でも魔法関係初心者だと契約出来ない。

代わりと言っては破格な事に、お互いの魔力で契約している為に仮契約であっても無期限となる。勿論、片方が死ねばカードも死ぬ。

●仮契約

パートナー契約の方法の内、期限を設けて契約を行う事。人数制限が無い。

現在主流の契約方法では、周囲の精霊等の力を借りて契約する為、仮に主従揃って魔法素人だったとしても契約可能。その代わり期限付き。

期限は、未設定ならば10年程持ち、主人側のカードに魔力を流す事で何時でも契約更新が可能。

前書きで次回から急展開だと言ったな——あれは、嘘だ。

今回は紅き翼のアーティファクト紹介だ。全員出そろったのでな。

……まあ、ラカンとアルだけなんだが。

つまり、超展開はその次という事。ラ・ヨダソウ・スティアーナ

……

設定集 紅き翼所持のアーティファクト + α (前書き)

紅き翼連中の武具が出揃ったので、紹介。

まあ、いつも通りの捏造設定です。ひやはー

設定集 紅き翼所持のアーティファクト + α

『無銘の大杖』

ナギ・スプリングフィールドが持つ、自身の身長を越える長さの杖。

2メートル近い長さを持つ、無駄にデカイ木製の杖。ナギが銘を付けていない為、特に名称は無い。

その実体は、ナギが真帆良に向かった際にへし折った世界樹の枝であつたりする。

大抵の魔法発動体では、ナギの馬鹿出力に耐えきれず吹き飛ぶのだが、元より莫大な魔力量を帯びている世界樹の枝である。流石世界樹だ、何とも無いぜ！！

当時、幼少の頃に呼んだ本の内容を奇跡的に覚えていたナギは、折った枝（というには大きすぎる）を持っていき「俺が折りました」と言ったら許されると思ったが、当時から学園長である近衛近右衛門にブン殴られて賠償させられた。哀れナギ、大会優勝の賞金は全て持っていかれてしまった。まあ、自業自得だが。

恐らく、枝を折った事はナギの中でもトップクラスの悪戯だったのであろう。

『夕風』

青山詠春の現物の得物。

形態は刃渡り1メートルを超える野太刀。

気で強化していれば殆ど刃毀れせず、簡易メンテナンスだけで切れ味を維持できるチートな刀剣。その性能は、様々な武具を見てきたラカンでさえ「いいなアレ、ちょっと欲しい」と思う程である。

元来は対人戦用の得物では無く、大型の妖魔を撃ち滅ぼす為のもの。

その為、クロスレンジや自身より小さい敵を相手する為に小太刀でも持つておいた方が良かったが……何故か詠春はこれ1本で戦っている。

『千の顔を持つ英雄』

ジャック・ラカンの仮契約アーティファクト。

マスター
契約相手は、ナギ・スプリングフィールド。

形態は無形。これといった形状が無く、しかも数の制限も無い。全てはラカン自身のイメージに左右される。つまり、イメージ力が重要であり、しっかりとしたイメージが出来ない場合、出現物もどこか曖昧になる。

逆に言えば、イメージさえできれば割と何でも出てくる。100倍サイズで剣を出す事も可能。

ラカンが使った場合、俺様最強理論と合わせり最強にみえる。だが、素手の方が強い。

本来、複製する工程には『対象を隅々まで知っている』という前提がある。

刀剣ならば、重心等が解らなければ使い勝手が大きく変わるし、材質を知らなければ強度が変わる。

機械や魔法具などに到っては、機構や刻まれた術式、プログラムが解らなければ当然複製など出来ない。

……が、このアーティファクトはその辺を無視して、イメージだけで現物と変わらない逸品を産み出す。

とは云え、流石に魔法やプログラムを詳しくは知らない為か、意外とリアリストなラカン^①は魔法具や機械を出す事は無い。何故なら、理論的に「その様に動作する機構」をイメージ出来ないからである。

結局、ラカンにとって遠距離攻撃用の投擲物製造アイテム程度の感覚しかない。

また、召喚したモノを全て投げてしまうと手元からカードが無くなるので、常に小さなナイフでも指輪でも、小石でも良いので手元に残すようにゼクトに言い含められている。

『イノチノシヘン』

アルビレオ・イマの仮契約アーティファクト。

マスター
契約相手は、ナギ・スプリングフィールド。

初期状態は白い本。真っ白という訳ではなく、薄らと模様程度は見取れなくもない。

アルビレオが呼んだ名前の者が魔力が気を流す事で人物データが記録され、『半生の書』となる。データが記録された時点で着色され、精製された半生の書は、アーティファクト再召喚時に周囲に展

開される。

展開された際、使用頻度順や更新順、登録順や名前順など、便利な並び替え機能付き。

ちなみに、1人につき1冊しか書は作成できず、既に『半生の書』がある場合、更新という形で記録される。

付属する栞に魔力を流し込み、本に一度挟み込んでから取り出す……という工程を行う事で、その書に記された人物の外見・身体能力と同等のモノに自身を変質させる事が可能。

第5話でアルビレオは、カッコ良く本から栞を引き抜いていたが……別に、普通に開いて取り出しても何ら問題は無い。単に、演出好きのアルビレオが「その方がカッコ良い」とか「発動まで早くて理に叶っている」とか思っているから行っている動作である。

ちなみに、儀式に関しては捏造。ついでに言うと、相手の名前を呼び、魔力が気を流し込んでくれればそれで契約成立するので、契約の儀式っぽい事を口走らなくとも『半生の書』は作成可能だった。やはり演出好きのアルビレオの趣味。

また、アルビレオが過去契約していた際と同じアーティファクトらしく、かつて所持していた際には中々強い人が登録されていた（ゼクト談）

『半生の書』

アルビレオのアーティファクトの一部。折角なので、別として解説する。

内容は、記録された人物のこれまでの人生を伝記として綴った書

であり、その伝記は書の丁度中間まで続く。後ろ半分のページは完全に真っ白であり、何も記されて居ない。

これは、『半生の書』であるからであり、後半の余白はその人物の余生を表す空白である。つまり、未来は未だ解らない、とかそんな感じ。

……とは言っても、余命幾許かだったり、致命傷を受けてあと数分で死ぬ、というような人の書を作っても、キツチリ半分が真っ白になる。兎に角半分は白いページとなる。問答無用で。

アーティファクトとして能力再現を行う際、若いページに栞を挟み込んだ場合、その栞を挟んだページ辺りの状態で再現される。

具体的に言くと、かつて超人的な身体能力を持っていたが大怪我をしてボロボロになってしまった人物の半生の書を作った場合、大怪我について記されているより前のページを開いて栞を挟み込めば、超人的な身体能力を再現できる。

アルビレオが能力再現する際、ばらばらと捲っているのは、目的の能力を持っている状態のページ……まあ、大抵の場合は書を作った時点、つまりド真中ぴったりを開く為である。

後半の真っ白ページに栞を挟んだ場合、何も起きない。

第6話 ヒゲメガネと、ヒゲメガネ（予定）（前書き）

前話の投稿から、モノ凄い速度でPV数が伸びました！ありがとうございます！

お陰さまで、PV14,000越えました。早いよ！

そして今回、ゼクトの実力の一端（？）が！

……いや、そうでも無いか？

第6話 ヒゲメガネと、ヒゲメガネ（予定）

—— ハムツ、ハフハフツ、ハフツ！
—— パクパクモグモグ。

「フツ、御替わり！」

「何イ…… てつめナギ、俺より先に御替わりとか如何言つ事だ。オバチャン、俺も御替わりだ！」

「お前ら、少しは落ち着いて食えないのか？！」

「フッフ、知っていますよ詠春。貴方の様な者の事を——」

「アル、それは今関係無いんじゃないかのう」

入力（食事）と出力（会話）は別系統だから並行動作余裕でした！（いや、その理屈はおかしい）

……とでも言えば良いのか。

騒ぎながらも確りと食事を行い、食べ散らかすでもなく何故か綺麗に平らげて往く馬鹿2人は、やはりバグキャラだからなのか。

人間辞めてるんじゃないかこいつら、と詠春が思い始めた事も致し方無いだろう。

「お、あんた達戻って来たのかい。丁度良かった、今出来た所だよ。さっさと手洗って席に着きな！」

仮契約によるパートナーカードの効果を確認、紅き翼一行が宿に着いた頃。

丁度良いというか、御都合的というか、彼らの食事の準備が出来た所であつた。

やはりというか、当然というか、まあ仕方ないよねーというか。

美味しそうな臭いが鼻腔に辿り着いた瞬間、瞬動術を用いて超高速で一階食堂奥に位置する手洗い場へと移動し、先を争う様に――しかし到着順を守り、一瞬でも先に着いた方から手を洗い、ナギとラカンが素早く仲良く(?)席に着いていた。

それと言うのも、オバ・チャーンが食事に厳しいからである。

外から入って来た場合は、濡れ布巾で手を拭かないと料理を出してくれないし、宿泊客の場合は濡れ布巾を出して貰えないので、奥の手洗い場で洗ってこないと料理を出してくれない。

もし手を洗わずに席に座ったりなどしようモノなら……凄まじい勢いの『影槍』が飛んでくるだろう。

彼らからしてみれば、その程度余裕で避けるなり、防ぐなり出来るだろう。戦場の第一線で戦う男と、食堂の第一線で戦う女の魔法戦の腕前は比べるまでも無く、前者が強い。というか紅き翼が比較相手である時点で間違っているのだが。

しかし彼女には最終兵器があった——それは、『肉抜き』である。

数日前、この宿に宿泊し始めた初日。

前線から帰って来たナギとラカンが手洗いうがいもせず、席に着いて最速で催促した。

その結果が『肉抜き』である。料理から一切の肉が消えた。

肉野菜炒め（野菜のみ）、生姜焼き（生姜の丸焼き）、フォカチヤ（具無しピザ、或いはナン）、他いろいろ（無論肉無し）。

脅威の徹底振りである。

無論、馬鹿2人は抗議した——前線で頑張ったんだから、肉食わせろ。

それに対し、彼女は影槍と共に言葉を飛ばした——手を洗わない奴が悪い。

最前線で戦い、腹が減っているであろう男相手に言う言葉では無いだろうが、彼女とて最前線で戦う料理人。膨大な料理を作り食堂を切盛りする彼女にとって、手を洗わない奴は、戦場で背後から味方ごと攻撃する迷惑な奴と同等の扱いである。敢えて言おう、カスである。肉以外だけでも出すだけありがたいと思え。栄養価のバランスは以外と良いんだからな、動物性たんぱく質以外は。

だが、この程度であのナギとラカンが止まるハズが無かった。

肉への渴望により食欲の波動に目覚め掛け、2人は魔力と気を放出し始め、一時騒然となった食堂であったが……オバ・チャーンの「暴れたら明日からも肉抜きだからね」という一言を聞いて大人しくなった。

宿泊初日ではあるが、村に着いた当初の食事もココだったのだ。
つまり、彼女の料理の美味さを知っていた。

この地方にしかないスパイスでも使っているのか、彼女の料理の腕前が凄いのか。もしかすると料理を美味しくする魔法でも掛けてあるのかもしれない。まあどうでも良い、美味しい料理は正義なのである。いつそ軽い中毒性があると言って良い程だ。

……兎に角、この村に居て、彼女の料理を食べられないという拷問は馬鹿2人を止めるには十分だったのである。

一瞬で馬鹿を止めた彼女に対し、詠春が本気で尊敬の視線を向けた事は完璧に余談である。

「あー、今日も食った食った」

「御主ら、食べた量が明らかにおかしいじゃろ……」

結局、馬鹿2人は4人前程の量を平らげた。

普段ならばラカンの方が体格が大きい分だけあって多く食べているのだが、今日は仮契約で魔力を注ぎ込んだ為に疲労したのか、ナギが若干多く食べていた。

そんな彼らが食事を終えて部屋で寛いでいると、コンコンと扉を叩く音と声が聞こえた。

「すみませーん、紅き翼さんのお部屋はこちらですかー？」

「……………確かに、私達が紅き翼ですよ」

扉から聞こえたのは、まだ声変わりすら迎えていない少年の声だった。その声の主に対し、アルビレオが返事をする。

返事をしながら、仲間に視線を向け……

「あ、良かったココで合っていましたか。では、失礼しま——ヒ
イツ?!」

アルビレオとゼクトが「何時でも魔法を撃てる」という意思を思わせる指先を向け、詠春が得物を突き付けている状態で扉が開いた。少年涙目である。

扉から顔を覗かせた少年は、多少煤汚れたシャツとズボンを身に纏い、その上からまあマシなコートを着用した……声からの想像通り、10歳程度の少年だった。

「う、うあ……………怖く無い、怖く無い……………いや無理ですよっぱり怖い
いです師匠おー!!」

「ハハハハ、やはり怖いかタカミチ。だが怖いって事は生きてるって事だ、その事を忘れるなよ?」

「は、はいっ! 解りました、師匠!」

そして、中途半端だった扉を完全に開き、硬直している少年の後ろから姿を現したのは、中年のオッサンであった。

メガロメセンブリア情報捜査局所属、ガトウ・カグラ・ヴァンテンバーグ。そう名乗ったオッサンは、なんと連合からの連絡係としてやってきたオッサンだと言う。

なんでも、前線に居る紅き翼を素早く探し、多少帝国軍に見つかるうとも任務を遂行できる者が他に居ないので来たとか。

そして、先程涙目にされた少年は、高畑・T・タカミチ。オッサン曰く、ココに来る途中で拾ったとか何とかであるらしい。

未だ幼さすら感じるタカミチ少年であるが、年月を経て成長し、そのオッサンのようにオッサンになってしまうのであろう。

オッサンがゲシュタルト崩壊してきた。

「……………で、そのメガロメセンブリアの捜査官の任務とやらは何かのう?」

「あー、うん。まあ言っても問題無いか? ……戦争を終わらせる為、君達『紅き翼』と接触しろと言われてね。どちらかと言うと、今回の命令連絡ってのはついでかな?」

「ん? つまりアンタも俺達の仲間になるって事か。その……えっと、タカマチだっけ。お前もか?」

「タカミチです。えっと、僕は師匠に戦い方を教えて貰ってはいますけど……今まで魔法も使った事無いので、自分で言うのも何で

すが凄い弱いです」

「ふーん、凄い弱いのか。……まあ、今日からお前も紅き翼な、ハイ決定。って訳で、よろしくなータカミチ！」

何が気に入ったのか、ナギはタカミチを仲間任命した。
いや、ナギが気に入ったのだ。理由などそれで十分なのかもしれない。まあ、言われたタカミチ少年は「あ、あれー?!」などと混乱していたが。

「で、結局連合からの命令とやらは何だったんですか？　そろそろ戦線を進めろ……といった所でしょうか」

「ああ、グレートブリッジが陥落したんだ。その奪還作戦を行うから、至急戻れとの事だ。紅き翼の攻撃を合図に、作戦開始だそうだよ」

帝国による攻撃でのグレートブリッジ陥落。

この衝撃的な情報を聞き、ブチ切れた者が居た……ゼクトである。彼程では無いが、アルビレオも怒気を発していた。

「西の橋が落ちた……ふふ、連合は戦線維持すら出来ぬのか。もはや連合というよりも烏合の衆じゃな……」

「全く持ってその通りですね。あの橋は魔獣等に襲われない、安全な貿易路を確保する為のモノですから。そう簡単に落ちはしないハ

ズですしね？」

突然笑顔で毒を吐き始めたゼクトとアルビレオに対し、付いて行けないガトウは混乱した。

他の連中は、まあ「やつべ、ゼクトが切れた」程度には思っているが、まあ直接的被害を受けるのは件の帝国軍だろう、と考えて樂觀視した。

怒れる2人は、荷物置き場となっていたベッド下段から自らの荷物を取り、扉から出て行ってしまった。

これまでの付き合いから、出て行った2人が如何言った行動をとるかが解った残りの3人も自らの荷物を持ち、扉から出て行った。

……結局ガトウとタカミチの2人は、最後に出て行く詠春が声を掛けるまで正気に戻る事は無かった。

「ふむ、術式はこれ良し。……あとは転移先指定だけじゃな」

「そうですね……グレート＝ブリッジのどの辺りに転移しましょうか」

「敵の流れ弾を考慮して、連合側が良いんじゃないかの」

一足早く外に出た2人は、一階の食堂でオバ・チャーンに宿を出る事を伝えて屋外へと出ていた。ココは食堂が宿の受付も兼ねているのである。

そして他連中が宿を出た頃には、鼻の先にある広場に大規模転移術式スクロールを広げていた。

……やはり、ゼクトの影から出した代物である。

「……ふむ。ゼクト、この転移先は連合側、橋の終端ですね？」

「そうじゃが。何か問題でもあるかの？」

「どうせなら、空中転移した方が良いのでは。敵の配置も簡易とは云え確認できますし、何よりも攻撃角度からして、私達の流れ弾が王国に行きません」

「……ふむ、確かにそれは有効じゃな。採用するでしょう」

魔法陣に書きこまれた転移先の術式を次々と書き直していく。

転移先を橋の西端という『キーワード』から、『絶対座標指定』へ。転移先の座標を書き込み、高さを極端に上げる……その高さ、高度10キロメートル。後ろで聞いていた詠春が、「実はゼクトも案外バカなのではないか」と疑ってしまったのも仕方ないかもしれない。

「よし、完成じゃ……良いか、この先は既に戦場。グレートブリッヂ西端……連合側じゃな。かなりの高度に転移先を指定しているから、そのままボーっとしていると死ぬから気を付けるんじゃぞ。まあ、飛行術や虚空瞬動を使える御主なら余裕じゃろ」

「そして私達はその転移先、帝国艦隊よりも高い位置という利点を生かして艦隊や兵の配置を確認。上空から強襲をしかけます。間違っても、王国へ攻撃を飛ばさない様に気を付けてください」

突然始まった作戦会議。だが後から来た3人は余裕で付いてきていた。

ナギは「スカイダイビングか、初体験だぜ」等と最早半分遊び感覚であり、ラカンやナギに尋ねたスカイダイビングの内容を聞いてやはり半分遊び感覚。そして肝心のストッパーである詠春は転移先は寒く無いのかを心配していた。コイツも案外思考がアレである。

そして、その話の途中で追いついたガトウとタカミチは慌てた。まさかココから戦場まで直接転移しようとするなど考えていなかった。

常識的に考えればそんな事を実行するバカは居ないし、初遭遇時の応対からしてゼクトとアルビレオの2人はマトモな思考をしていると思っていたからだ。

「ちょ、ちょっと待って下さい！ 僕、そんな所に飛ばされたら死んじゃいますよ、まだ瞬動も出来ないんですよ！」

「君達は大丈夫かもしれないが、タカミチ君はまだ基礎訓練すら終

わって無いんだ。転移先は最前線……艦隊や鬼神兵なんかも居るハズだ。その状況では、流石にタカミチ君を守りきれる自信が無い」

事実、タカミチはガトウに拾われるまで殆ど戦闘訓練というモノをした事がない。その為に虚空瞬動どころか、通常の地に足をつけた瞬動すら出来ないのだ。

一方でガトウは職業柄戦闘も一線級であり、紅き翼（バグキアラ除外）にも引けを取らない程の実力者だ。しかし、その戦闘スタイルから護衛は得意では無い。小数相手ならまだしも、艦載砲等が飛んできたら防ぎきれないのだ。

「そちらの事情なぞ知らん。現在の最優先事項は、如何に早く戦線を王国から離すかじゃからの。何なら、御主はその少年と残り、後から追い付けば良い」

「……それが良いでしょうね。私達が先に行って帝国軍を退けます。貴方達2人は後で合流すれば良いでしょう……そうですね、ある程度戦線を動かしたら、橋の王国側にでも来てください。そこで合流しましょう」

「む……そうか、じゃあそうさせて貰うよ。仲間になったばかりだが、早速別行動になっちまったな」

話ながらも、ゼクトとアルビレオは手早く転移の準備を進めていた。

魔力を次々と魔法陣へ注ぎ込み、一定量でスクロールが炎上する。後に残ったのは、先程まで描かれていた魔法陣の形に燃え上がる

炎の線。数ある転移魔法の中でも使い勝手が悪すぎて使用者が残っていないモノ。それは『空気』を媒介とした転移魔法だった。

理論的には簡単である。炎によって発生した陽炎……つまり、密度の違う空気を発生させる事で、その密度差から生まれる光の屈折の差で発生する揺らぎ、つまりハッキリと視認できる『空気の膜』を門として転移するという術式である。

この転移の利点は、空気がある場所から同じく空気がある場所へなら何所へでも転移できる事であり、言ってしまうえば水中や地中、宇宙以外でならどこでも使えるという事である。さらに、一度門さえ開けば術者が解除するまで継続し、複数人数での転移すら可能である事である。

だが、勿論欠点もある。それは通常透明である空気を視認できるようにすること。今回の様に陽炎を産み出すには炎などが必要なので、手間が掛かるのであった。

「術式制御をおこなっているワシが最後に入る。アルは最初に入って状況確認を、続いてナギとラカン、最後に詠春の順じゃ。転移先で直ぐに戦闘開始するのでは無く、アルの支持に従うんじゃぞ……良いかの、全力でやれ。いつそ橋を破壊しても構わん——」が、死者を出したら地獄の説教フルコースじゃからの！」

ゼクトの支持を受け、紅き翼は出撃する。

中でも、ナギは背をピンと伸ばして敬礼すらして居た。それ程までに説教が嫌らしい。

「では御先に……」

「さて俺らも行くか。ガトウもタカミチも、また後で……次は王国で合おうぜ！」

「おう、タカミチ。早く強くなれよ？ そしたら俺とも闘ろうぜ、ハッハッハッハー！！」

「全くあいつらは……では、先に行かせて貰うぞ——ああそうだタカミチ君、さっきは刃を突き付けて悪かったな、許してくれ」

アルビレオ、ナギ、ラカン、詠春。

4人は順に陽炎へと飛び込み、その姿もまた陽炎のように揺らいで消えて行った。グレートブリッジまで転移したのだろう。

「行ったか……ではワシも続くでしょう」

そして、最後にゼクトが飛び込み、消えて行った……ガトウに念話を残して。

——連合が何を考えているのかは知らんが、妙な真似はしてくれなよ。

薄らとは云え、殺意すら込められたその言葉にガトウは背筋に冷たいモノを感じた。とは云え、ガトウは本当に仲間になるつもりで彼らに会いに来たのだ。妙な真似も無い。

きつと、まだ完全には信頼されていないだけだろう……そう思っ

て、気にしない事にした。信頼や信用は、これからの行動で勝ち取れば良い。

「どうしたんですか、師匠？」

「いや……何でも無いさ。さーて、俺達もグレートブリッジ目指して移動するとうか。……まあ、その前に腹ごしらえだ。その食堂はこの地方では美味いと評判と聞いてるし、折角だから食べて行こう」

「へえ、それは楽しみですねー」

以前聞いた『紅き翼』の実力ならば、グレートブリッジも素早く奪還できるだろう。

そう思いながら、噂に違わぬ料理の味に舌鼓を打っていた。

「あー、でも奪還早すぎて俺達が着く頃には待ちくたびれてたりとかしそうだな」

「……有り得そうですね」

結局、食事の直後から王国までの最短ルート……つまり、全力で

北上するハメになったのであった。

食後の運動にしてはキツすぎるが、「タカミチ君の訓練ついでにもなるかなー」などと考えながら、ガトウは走り続けるのであった。

第6話 ヒゲメガネと、ヒゲメガネ（予定）（後書き）

やっと次回戦闘です。
長かった。

ちゃんと次回はグレートブリッジ奪還戦です。
上手く描写できるかなー！。

第7話 グレートブリッジ奪還戦、開幕（前書き）

気付いたら、前回更新から1ヶ月くらい経過してました。
なんてこったい。

第7話 グレート＝ブリッジ奪還戦、開幕

ウェスペルタティア王国と、メセンブリーナ連合の土地を結ぶグレート＝ブリッジ。

そこには、大規模転移術式によって強襲を仕掛けた帝国軍と、橋から追い出された連合軍とが睨み合っていた。

……そのグレート＝ブリッジ中央付近の上空、高度10キロメートル。

もう宇宙って言うっても良いんじゃないの？ という程の高さに突如として揺らぎ……屋気楼が生まれ、そこから1人の男が飛び出した。

ローブを身に纏った、その「どうも魔法使いです」と言いたげな格好の彼は、御存じ、紅き翼のアルビレオ・イマである。

「……多少落ちておかないと、追突されてしまいますね」

重力に引かれて落下したアルビレオは、落ち着いて浮遊魔法を使用した。元から上空に転移する事は知っていたのだ、慌てるハズが無い。

無事転移し、浮遊する事で高度を保った事を確認したアルビレオが空を見上げると、丁度ナギとラカンが飛び出してきた所だった。

空中に放り出された2人は、あまりの高さに一瞬慌てた……と思っていた。

しかし根性据わっている馬鹿なので、次の瞬間には無事浮遊して

いた。

続いてきた詠春も無事である。「気で強化してるから、案外寒く無いな」などと呟いている辺り、結構大物が、馬鹿なのか。

「マジで高えな……………帝国の戦艦が豆くらいのサイズだぜ」

「全くだ……………それで、どうするんだアル」

「ちょっと待ってください。戦況を確認しますので」

後続組3人の無事を確認したアルビレオは、改めて状況を確認する。

……………見た限りの帝国と連合の戦力はおよそ同等。

ただし、帝国側はグレートブリッジという砦がある為に連合側が圧倒的に不利。

しかし戦力そのものは同等なので、帝国軍も連合へ攻め込む事も出来ず。

——つまり、完全に両者睨みあい。

「どうやら完全に膠着しているようですね……………」

「つまり、どういう事だよ」

「簡単に言っなら、誰かが攻撃した瞬間に戦闘が始まる、といった具合ですね」

アルビレオの説明にナギとラカンが「ふーん」と納得した。
要は、横っ腹（上空）から強力な魔法でも叩きこめば戦端が開かれる、という事である。

そこに、ゼクトが降りてきた。
これでメンバーは揃った。後は行動方針を定め、実行するだけである。

「ふむ、ちゃんと言い付け通り待っておったか」

そう言っ、4人を見回したゼクトは、自らも戦況を確認しつつアルビレオに訪ねた。

勿論、アルビレオの回答は先程と同じく「膠着中、切欠次第で開戦」である。

「やはり御主もそう思つか……ならば、方針は1つじゃな」

「ええ、そうですね」

2人は顔を見合わせ笑う。
やることは決まった。ならば、後は実行に移すだけだ。

「良いか？ 現在、グレートブリッジに広がっている戦場には動

きが無い。しかし戦力は広範囲に渡って分布してある。これは、一度動き始めると全体が動き始めるだろう事は想像に難く無い。故に、最初の一撃でどれだけ戦闘不能に出来るかがカギとなる……ナギ、御主が最初に一撃を入れる役目じゃ。『千の雷』を頼むぞ」

「おう、派手にやってやるよ！」

グツ、つと腕を突き出して任せると言う。

相変わらず、ナギは自信に溢れていた。自信が無いナギなどナギでは無い。きつとそれは、ナギに似た別の何かだろう。

引き続き、ゼクトは作戦を伝える。

「まず、最初にワシが陽動として突撃する。流石に『千の雷』を放つ程の魔力が動けば奴等とて気付くハズじゃ……何よりも、どちらの陣営が解らぬ為に連合側からも攻撃されかねんからの。ワシの突入後、アルの合図で『千の雷』を帝国軍中央へ」

「それ、御師匠まで巻き込まないか？」

「ふん、ワシがそんなヘマをするハズ無かるう。御主は何も考えずに撃てば良い」

御師匠が言うなら大丈夫か。納得したナギは節々を伸ばして準備運動を始める。

その隣で、ゼクトは他メンバーの行動方針を伝えた。

まあ、後は簡単である。「確固撃破」「殺しは厳禁」、ただその

2点のみ。

「では、行くか——炎の精霊13人、集い来りて矢を放て。制御……射程10、拡散範囲60……魔法の射手、直進・炎の26矢——術式抽出、魔力放出、右掌登録」

ゼクトは呪文詠唱を行う。

基本構成は『魔法の射手』……しかし制御文を刺し込み、若干別の魔法へと変異させていた。

ちよつと本気を出しているゼクトに気付いたのは、アルビレオだった。

通常とは少し違う呪文を唱え、魔法を放たずに込められた『魔力』だけを廃棄。術式だけを抽出して右腕へと注ぎ込む。

「——直前術式引用、魔法の射手、直進・氷の26矢——術式抽出、魔力放出、左掌登録」

引き続き呪文を紡ぎ、今度は左手に紋様が表れる。
しばらく両手の具合を確かめていたゼクトは、満足したのか両手を下ろして落下して行く。予定通り、陽動を行っらしい。

「……なあアル、御師匠はさっき何やってたんだ？」

「あれは……何と説明しましょうか。遅延呪文の様なモノなのです
が……まあ、ゼクトの本気の一端、といった所でしょうか？」

「へえー……」

落ちてゆくゼクトを見下ろしながら、ナギは待つ。

どんどん小さくなって行き、とうとう砂粒程のサイズになった時、
ゼクトが落下した地点から突如としてドンツ、と音を立てて火が上
がる。

次々と吹き飛ばされる兵士は、所々焦げている者、凍っている者
など居るが、基本的に死んではない。ゼクトは今日も不殺である。

氷と炎の爆発は東へと向けて橋を走り抜けて行く。

所々に設営されていた仮設設備は次々と破壊され、兵士は橋下の
海へと落とされる。

最初こそ、突然の乱入者に混乱していた帝国軍だが、遂に行動を
始めた。

東部に居た兵士達が動きだし、次々と待機状態から戦闘形態へと
移行する。鬼神兵を召喚し、戦艦は主砲に火を入れる。

西部に配置されていた無事な兵士達も動き出す。

こちらは、連合軍へと向けて進軍する。背後の乱入者との戦闘は
東側の仲間に任せる。自分達はこの混乱に乗じて攻め込んでくるで
あろう連合を抑える事が最優先と判断した為だ。

漸く動き始めた戦場を見て、遙か上空に居たアルビレオはナギへと指示を出した。

「今です、ナギ！ 狙いは橋の中心部、帝国軍のド真中です！」

「よし来た、待ってたぜ！ —— 契約により我に従え高殿の王！
来れ、巨神を滅ぼす燃ゆる立つ雷霆——」

アンチヨコ片手にナギは呪文詠唱を始め、同時に降下を開始する。流石に10キロメートルも離れていては届かない。

莫大な魔力の動きを感知し、帝国・連合両軍は一瞬動きが止まる。

しかし、陽動として突撃したゼクトは止まらずに爆走を続ける。

当然だ、元からナギが上空から魔法を放つのは作戦に入っているのだから。

それを見た連合も動き出す。「上空の魔法使いは、敵では無い」と即座に結論を出し、帝国軍へと進撃を始める。

……直後、グレートブリッジに雷が降り注いだ。

「——百重千重と重なりて、走れよ稲妻ッ 千の雷……！」

射程距離ギリギリから放たれた広域殲滅呪文は、それでも十分な火力を以って帝国軍を蹂躪した。

戦力を大幅に削られた帝国軍は混乱し、連合軍は徐々に戦線を押

し進めていく。

今、グレート＝ブリッジ奪還戦の戦端が開かれた。

第7話 グレートブリッジ奪還戦、開幕（後書き）

次回はもうちょっと早く更新したいと思います。

まあ、次回は突撃陽動中のゼクト君のお話ですね。

第8話 グレートブリッジ奪還戦、帝国陣営編（前書き）

ユニークアクセス5、000突破しました。
ありがとうございます！。

今回の話は、ゼクト無双のちょっとした前菜

——のつもりで書いてたら凄く長くなりました。

……どうしてこうなった？

しかも説明臭い。

設定厨の悲しき定めなのでしょうか。

第8話 グレート＝ブリッジ奪還戦、帝国陣営編

「報告します！ グレート＝ブリッジ各部異常無し、伏兵や爆弾などの仕掛けは物理・魔法両面を共に走査しましたが、確認できません！」

「ふむ、そうか……よし、各部へ伝達！ 内部警戒は終了。橋西端の連合軍の警戒は継続しつつ、外周の海を警戒だ！ 鬼神兵は瞬時に動かせるように準備だけは怠るなよ！ それ以外は、各自交代で休息を取りつつ、警戒に当たれ！」

「ハッ、了解しました！」

伝令である青年へと指令を出した本作戦における現場での最高責任者である男は、グレート＝ブリッジの東側3分の1程の場所に位置する、国境検問所を一次的に占拠して利用している仮設指令部に居た。

先程の青年も、この男も米神の少し後ろ付近から前方へ向け、螺子曲がるように角が生えている……ヘラス族の証だ。

ここは、ヘラス帝国のウェスペルタイア王国奪還作戦とその要、グレート＝ブリッジ制圧作戦を主な任務とした軍団の前線司令部だった。

ヘラス帝国北西陸軍、グレート＝ブリッジ制圧作戦特別軍団。
10万以上の兵士で構成されたこの軍団は、王国と連合を結ぶ500キロメートルにも渡る超大な橋、グレート＝ブリッジを奪還・占拠する為に組織された軍団だ。

500キロメートルと言うと、東京・大阪間の距離にほぼ等しい程だ。その範囲を占拠すると言うのだから、どれほど大規模だか解るだろう。……規模が大きすぎて、逆に解らない気もするが。

「……………漸く、王国を連合共の手から取り戻す時が来たか」

総指揮官を務める彼、トリトス大將は設営された設備の椅子に腰かけ、懷から煙草を取り出し、無詠唱の発火魔法で火を付けて燦らす。

煙を吐いてから呟くその言葉には、様々な思いが込められていた。

そもそも、この戦争の発端は何だっただろうか……………

思い返してみれば、その辺りは酷く曖昧だ。

この戦時中に色々と噂は耳にしたが、どれも根拠………というか、明確な証拠が無かった。

——曰く、人間による亜人迫害に対する帝国の反撃。

とは云え、人間と亜人の個体差は殆ど無い。ここで亜人とは『人間』以外のヒト全てを指す。つまり、ヘラス族や長命種、果ては魔族なども含む。

亜人は人間が持たない特殊な力を持っている種族すらある。精霊族や龍人族などがその良い例だ。つまり、迫害というよりも『異種族への恐怖』と言った方が近いのだろうか？

個体としての能力が強力だったり、寿命が長い種族など、人間族と比べて明らかに秀でた点を持つ種族は繁殖能力が低い事が多かったりもするのだが。

まあつまり、実質的に迫害などされて居なかったし、出来なかったのだ。

逆に、亜人達からも手出ししていなかった。大昔から王国の人間と交流して来たのだ。別に人間族に対して特に思う所は無い。

要するに「皆違つて、皆良い」理論である。子供っぽい言葉ではあるが、事実その通りだったのだから問題は無い。

——曰く、連合が領土（活動範囲）を広げる為に侵略してきた。これは有り得るかもしれない。しかし、明確な証拠が無いというか何というか。

確かに、数十年前までは大陸全土が帝国領だった。精確には、帝国と王国が普通に暮らしていただけであり、特に領といった区切りが無かったただけなのだが。一世紀前、そこに突如として現れたのが『北の民』、現代では『連合』と呼ばれるグループに所属する人間達だ。

以来、彼ら『北の民』は活動範囲を広げ、大陸の半分を領土にするまで肥大化したのだ。

つまり、今だ使用しておらず未開の地であつた地方を勝手に開墾して都市を作つて行つたという事なのだが。まあ当時の帝国の議会では「まだまだ土地は余つてるし良いんじゃない？ 彼らもある程度で拡大が収まるだろう」と結論を出していた。……この会議を発端にして帝国に『領土』という概念が生まれたのは別の話だ。

ちなみに、この魔法世界に大陸は2つしかない。帝国や王国、連合本国のあるノトス大陸と、龍山地方とも呼ばれているボレアス大陸だけだ。他は大抵小島か、陸続きなので半島扱いされている——

——閑話休題。

そもそも、これでも彼は帝国軍部でも割と上部に在籍している。

この作戦の総指揮官として動いる事からもそれは明白だ。要するに、偉い。特に国の防衛関連については。

……だと言うのに、連合に攻め込まれたという報告は受けていない。

とは言え、彼が受け持つ範囲は、主にシルチス亜大陸、つまり帝国の北部地方。それも西寄り——言ってしまうえば、ウェスペルタイア王国方面だ。他のプロメテ高地（帝国東）や、アルギュレー大平原（帝国西）、メレア高原（帝国南）から攻め込まれたというのなら、彼が知らないという事も有り得る。

……それでも報告が無いのは不思議だが。

——曰く、地方の小競り合いが世界レベルに広まった。

確かに、一部地方では国境での小競り合いは頻繁に起きていた。

例えば食糧事情。

帝国と連合は大陸を南極で二分している……それは良いのだが、南極から少し離れると、気候の変化が激しい地域があるのだ。砂嵐や突然の寒波など、それはもう様々な気候が襲いかかる。その結果、穀物が被害を受ける事が多い。すると周囲の都市から輸入を行うのだが、当然周辺都市も被害を受けている。……で、お互いに食糧の奪い合いになるのだ。どちらかと言うと国同士の争いというよりも帝国・連合入り混じっての地方食糧争奪紛争といった方が良かもしれない。

大抵の場合、無事だった別地方から物資が届く事で食糧事情が改善されて収まるのだが。

しかし別に食糧事情が悪化した訳では無いだろう。事実、帝国の中枢、帝都ヘラスでは食糧に困ってはいない。つまり、地方へ送る事が可能である以上、食糧争奪紛争が拡がる事は無いハズである。

——曰く、連合が王国を取り込もうとした為に帝国が妨害した。とりあえず、現時点で一番有力だと思っている説だ。

ウエスペルタティア王国と、学術都市アリアドネー……この2つは永世中立国だ。後者は国と呼んで良いのか怪しいが、政治体系などが完全に独立しているのだから、別に構わないだろう。

それ以前に、この魔法世界にはアリアドネー含め3つしか国が無かった。ヘラス帝国、ウエスペルタティア王国、学術都市アリアドネー、以上の3つだ。つまり永世中立国というか、単に『帝国では無い地域』を示しているだけだ。

その帝国でさえ、内部は細かく細分化されている。帝都ヘラスを中枢とした、地方貴族による領地管理……と言えばそれっぽく聞けるが、実質的にはそれぞれが国の様なモノだ。一応、帝都ヘラスの立場は『上』として扱われているが、実際には貿易などを始めた各領地との取引中は対等として扱われている——話が逸れた。

つまり、ウエスペルタティア王国は確かにヘラス帝国に含まれてはならず、人間が多く住む国だ……しかし、メセンブリーナ連合の一員でも無いのである。

だと言つのに、連合は「同じ人間が多く住む国だから」と言つて取入れようとする。おそらく、その辺りが「連合が亜人を迫害している」という話に繋がっているのだろう。実際はどうだか知らんが近年では帝国・王国間での貿易も減り、逆に連合・王国間の貿易量は増していた。

当初は新しく土地を開拓する為に物資が必要である連合との取引を優先している……と考えていたのだが、既に連合の主要都市は完成しているし、現に戦争を出来る程の軍隊……それも空挺師団すら持っている。

それでも尚、引き続き連合との取引を重視しているとなれば……それは確かに、連合に王国が浸蝕されつつあると考える事も出来る

だろう。

そう言えば、王国の首都である王都オスティアは聖地として崇められている。

何でも「この世界の全てのヒトは、オスティアから始まった」らしい。1000年以上前の文献にすら記されていると言ふ事なので、恐らく、あの浮遊都市には何かあるのだろう。

つまり、その歴史ある聖地を横から来た者達に奪われたくない、という意思もあるのだろう。何せこの作戦は『奪還作戦』なのだから。

「——む、悪い癖だ。つい物思いに耽ってしまう」

これも歳を取ったからだろうか。

……いや、まだ100歳前なのだ。ヘラス族は『人間』と比較して倍近い寿命を持つ。つまり、まだ私は若い。

「そ、総司令官！」

トリトス大將が自分自身に言い聞かせていたその時だった。

男が1人、扉を吹き飛ばすような勢いで開けつつ、息を切らせて部屋へと掛け込んできた。

「どうした、何事だ?!」

「そ、空から……空から、男の子が!!」

「何だとツ!? ……ん?」

トリトス大將は耳を疑った。

それ以上に、眼の前の男の頭を疑った。というか心配した。

こいつ真面目な奴だったんだけどなあー、と思いつつ、頭痛が痛い頭を押さえつつ、一応訊き返す事にした。

「いや待て、もう一度頼む。聞き間違えたかもしれない」

「ですから、空から男の子が降って来たのです。歳は10前後、髪色は白で、服装は長袖のパーカーでした」

誰が詳細に話せと言ったのか。

確かに、眼の前の男は普段から視力が良い事を自慢している様な奴であり、その技能を生かして広域監視を任務にしていた。

だからまあ、そいつが言うのだからその通りの格好をしているのだろう。

しかし、空から少年が落ちてくるとは如何言う事なのか。

連合の仕業と考えても、全く持って意図が解らない。もしや転移事故か何かだろうか。

現在、グレートブリッジ周辺には転移阻害術式が張り巡らされ

ている。

これは連合軍が、帝国軍による『大規模転移作戦』を模倣する事で橋の内部へ転移し、反撃してくる事を防ぐ為の措置だ。

その転移阻害術式が干渉し、転移途中でこの戦域に放り出されたのでは無いだろうか？

「……で、その落ちてきた少年はどうなったのだ」

「はあ、とりあえず空から落ちてくる事を確認したので、その時点で報告に参ったので……その後はなんとも」

つまり知らないらしい。コイツは時々融通が利かない。

それだったら、念話装置を使って連絡すれば良いだろうと問えば「使い方を忘れました」と返事を返された。

そう言えばこいつは古い人間だった。何気に自分より年上であるし、そもそも地方のド田舎で暮らしていたハズだ。こういった最新の魔法装置に慣れていないのも仕方が無いのかもしれない。

渋面でどうしたモノか……と腕を組んだ所で、新たな伝令が飛び込んできた。今度はちゃんと念話装置だ。

——グレートブリッジ中央付近に襲撃者あり。

軍団全体に緊張が走った。

「……おい、その少年はどの辺りに落ちたんだ」

「着地前に来たので詳細は不明ですが、橋の中央付近だったかと……」

……

「……………」

直後、辺り一面に魔法が降り注ぐ。

……………戦闘開始だ。

第8話 グレートブリッジ奪還戦、帝国陣営編（後書き）

「空から男の子が！」という台詞を入れようと思った所為で、気付いた時にはこんな事に……

トリトス大将の出番は、今後あるのか。

それは作者すら知りません。

ちなみに、この世界ではヘラス族の外見年齢は人間の半分です。

つまり、平均寿命180くらいとして設定しています。

その代わりに、ちよつと子供が出来辛かったりします。まあ寿命が長いので大して影響無いですけど。

第9話 真・三国ゼクト無双（前書き）

PV：30,000、UA：6,000を超えました、ありがとうございます！

サブタイトル通り、今回はゼクト無双回です。

……が、描写の所為であんまり無双してる感じがしない。

実は、ゼクト主観で書いてるつもりだったハズなのに……うん、全然主観じゃないね。どうしてこうなったんだろう。

何故かシリアス風に書くとこんな文体なるし。っかしーな。

第9話 真・三国ゼクト無双

時は戻って、紅き翼の転移直後。
ゼクトによる陽動作戦開始直前まで遡る。

「では、行くか——炎の精霊13人、集い来りて矢を放て。制御……射程10、拡散範囲60……魔法の射手、直進・炎の26矢

ゼクトは、詠唱を行わずとも世間一般的に最上級呪文と呼ばれる魔法を放つ事が出来るという、最強と言って良い魔法使いだ。本人は『最古の魔法使い』と自称しているが。

その彼が詠唱を行うという事は即ち、凄まじく緻密な制御を行っているという事に他ならない。

故に、先程の詠唱によって構成された術式も、当然の様に緻密で、繊細な、それはもう絵画で表現したら芸術的過ぎて国宝、いや世界の宝だと称賛される程の逸品となる。かもしれない。

先程の魔法は基本構成は炎の精霊を媒介とした『魔法の射手』だ。しかし制御文により変質した魔法の射手は、元来とは異なる性質を持つ。

「——術式抽出、魔力放出、右掌登録」

そして、構成した魔法から術式だけを抽出し、右腕表面へ『回路』として書きこむ。

「——直前術式引用、魔法の射手、直進・氷の26矢——術式抽出、魔力放出、左掌登録」

続く呪文は、先程の呪文を引き継ぐ形で行われた。炎の精霊を呼び集める術式は氷の精霊を呼ぶ術式へと変えられ、今度は左手に紋様が表れる。

術式描画を完了し、ゼクトは調子を確かめるように両手を握りしめ、そして開く。紋様に変化は無い。簡易な走査を行ってみても、異常は無い。

「では、いくつかの」

ちらり、とアルビレオとナギへと視線を送り、ゼクトは落下する文字通り、落下だ。浮遊も、飛行も、瞬動も無い。一切の落下速度軽減無し之急降下により、グレートブリッジへとゼクトは加速していく。

橋の西に東にと広く展開されている帝国軍には気付かれてはいない。

当然だ、一切の気も魔力も用いていないのだから。それこそ、ふと空でも見上げない限り見つからないだろう。

高速落下するゼクトは、大気を引き裂くように、空を泳ぐように、自分自身の身体を用いて、落下位置を調節する。スカイダイビングの要領だ。唯一の違いは、パラシュートを背負っていない事か。

——地上到達、までカウントダウン。7、6、5——

兵士一人一人の姿形が確認できる程度の高さまで到達すれば、後は着地点を細かく修正するだけだ。

狙うのは、より多くの兵士が固まっている箇所——では無い。そんな所に着地しよう物なら、着地の瞬間に攻撃されかねない。ゼクトが目指したのは、橋の中央部。

それは、東の王国側からの進行を防ぐ為に密集している部隊と、西に展開された連合軍を警戒している部隊。ちょうど、その境目。兵士が橋の両端、海からの襲撃を警戒している部分だ。そこなら橋の中央部には人が少ない。

……見張りの交代か、気分転換か。
休憩施設（勿論、元は橋の途中休憩所だ）から出てきた兵士が、空を見上げた。視線が交差する。

（気付かれたか……だがまあ、遅い）

地上に衝突する直前に両足へと魔力を集束させ、解き放つ。
解き放たれた魔力はゼクトの意思に従い、周囲の風の精霊に感応し、膨大なエネルギーを持った空気となり、吹き荒れる。それは風

の武装解除魔法に近い。しかし、それはついでだ。本命は、ゼクトの着地衝撃を軽減する事なのだから。

空から落下する少年を見て、何を思ったのか、何も思わなかったのか、或いは「俺疲れてんなあ」とでも逃避したか。

呆然と口を開けて空を見上げたままの兵士は、爆発的な烈風によって海へと放り出された。

周辺に居た兵士は皆風に巻き上げられ、海へと落下していった。

……残るのは、襲撃を察知して休憩施設から飛び出してきた数十人だけだ。

「クソッ、連合の攻撃か！？ 見張り何やってんだ！」

しかし、その兵士達も警戒するに値しない。

何せ、今迄休憩中だったのだ。志気もそれ程高くは無い。そもそも、500キロにも渡る長大な橋の中央部だ。南と北、海からの襲撃は一応警戒しているとは云え、殆ど気を抜いていた。襲撃があるなら、連合軍が陣を形成している西側からの攻撃か、王国内部に潜む連合派による東側からの攻撃だと予測していたのだから、中央部は東西の兵士と比べれば、明らかに錬度も志気も低い。

そして当然、そんな兵士では何人集まろうがゼクトにとっては烏合の衆でしかなかった。

「――放射」

「――な、なんっ!？」

ゼクトは兵士達に右腕を向け、その腕へと魔力を流しただけだ。ただそれだけで、周辺に漂う精霊は活性化し、炎のシャワーとなつて兵士へと襲いかかる。

撃ち漏らした敵には左掌を向け、今度は氷のシャワーが噴き出す。発生した冷気によつて動きが鈍つたトコロに、右掌を向けて炎、そして爆発。

放たれるのは上下左右に広がる魔法の矢。その矢は丁度10メートルを進んだ所で消失する。真横や真上から見たならば、中心角を60度とした扇型に見える事だろう。

一切の詠唱も無く、魔法のストック（遅延）でも無く、魔力を流すだけで魔法が発動する特殊技術。

これが、ゼクトの高速戦闘スタイル用の究極技法『魔法銃掌』。自分の身体の一部を、魔法銃のような状態にする、何か良く解らない技だ。

……とは云え、欠点はある。

詠唱を行わず、かつ魔力供給を行った瞬間に魔法を放つという行為には、一片たりとも周囲の精霊を集めるといふ工程が含まれていない。故に、発動箇所（今回の場合、手のひら）周辺に散在する、極少数の精霊だけで発動可能な魔法しか行使できない。或いは、その少ない精霊でも発動可能な程、莫大な魔力を込めるか。

それは、射程を縮めて消費魔力量を下げた、初級攻撃呪文（魔法の射手）程度にしか用いる事が出来ないという事である。

——しかしその制限でさえ、ゼクトにとっては都合が良い。

「さて、気付かれたじやろうし………突き進むかの」

橋の中央部を粗方片づけたゼクトは、続いて東——王国側へと突き進む。

まるで近代の精密機械のように、徹底的に効率化された術式で脚を強化し、高速で駆け抜ける。

視界に映った帝国軍兵士に右手を、左手を向け、炎と氷の矢を次々と放つ。殆ど不意打ちに近い形で攻撃された兵士達は次々と爆風で吹き飛ばされ、冷気で動きを封じられ、無力化されていく。

稀に反撃に魔法を放つ兵士も居るが、ゼクトはそれすらも最小限の動きで回避し、時に建物や帝国兵を壁にして防ぎ、足を止める事は無い。

何人が撃ち漏らしても大した事は無い。そもそも、今の彼は陽動役だ。背後から全力で攻撃されない程度に間引いてやれば、余程の馬鹿でなければ追いかけては来ないハズだ。

突き進むゼクトによってグレートブリッジの中央部から帝国軍に混乱が広がり、それを好機と見た連合軍が、西から攻める。

予期しない形で挟み打ちとなった（とは言え、ゼクトは反対方向へ進んでいるが）西側に展開していた帝国軍の部隊は、東側の部隊に襲撃者の対応を任せ、連合軍の攻撃からの防衛に力を裂く。背後（内側）からの攻撃は当然警戒しているが、それでも連合軍が乗り込んでくる事の方が余程危険だと判断した為だった。

(…………そろそろ、かの?)

何分経っただろうか、既に数えるのも馬鹿らしい程の兵士を海へと吹き飛ばしたゼクトは、空高く、つい先ほど自らが転移門を開いた付近の気配を探る。

——居た。自由落下しながら、莫大な魔力を練り上げる存在を感知した。恐らく、いや間違いなく馬鹿だ。^{ナギ}近くには、他の紅き翼メンバーも居るようだ。

次の瞬間、カッと空から閃光が奔りゼクトの後方、帝国軍の西側、その東半分程に居た兵士が雷に打たれ、吹き飛ばされて行く。ナギが放ったの『千の雷』だ。

あまりの出力に、随分と遠くから放ったと言うのにグレートブリッジの中央部は落ち、完全に帝国軍は二分された。

ゼクトの陽動とナギの『千の雷』を発端として、連合軍は帝国軍へと強襲を仕掛ける。

橋は背後で落ち、左右は海で囲まれ、前方にはグレートブリッジの幅一杯にまで敷き詰めたように並ぶ連合軍。さらに空には、先程魔法を放った恐らく連合陣営の何者か。

完全に追い込まれた形となった帝国軍兵士達は絶望し、志気も下がる。

正面の連合軍を倒すしか道は無いが、肝心の連合軍は補給や増援が見込める。勝機は全く持つて見えなかった。

そんな混乱の中、空からは先程の魔法を放った存在であろう、赤毛の男が降りてきたのだった。勿論、ナギの事だが。

帝国軍兵士からしてみれば、突然の大規模魔法による攻撃から始まり、逃げ道を奪われて連合と戦うハメになったのだから、さぞかしナギは恐怖の権化のように見えただろう。しかもその隣には、あの話を聞かない事で一部有名な傭兵、ジャック・ラカンも居たのである。「アイツを手懐けている……だと!？」と驚愕した兵士は少なくは無い。ラカンの無茶苦茶振りには帝国では結構有名なのだった。主に、戦闘を生業とする者達の間でだが。

……以降、帝国でナギは『赤毛の悪魔』と呼ばれる事になるのだが、まあ、それは余談である。

「始まったか。しかし、このままでは死者が出る……じゃろうな」

相変わらず、東へ駆け抜けながらゼクトは思案していた。

このままでは橋の西側に残された帝国軍は連合軍によって壊滅し、殲滅されてしまうだろう。それは、ゼクトの歓迎する事では無い。

……なので。ふむ、と諦めた様な顔をしながら、念話を繋ぐ事にした。

「――アル、聞こえるかの」

「――聞こえてますよ。一体、何です？」

念話の繋ぐ先は、アルビレオだ。

一般的に何らかの契約でパスを繋いでいるか、専用の道具が無ければ念話など出来ないのだが。流石のゼクト、逸般人ぶりを発揮して念話を繋いでいた。

ちゃんと繋がった事を確認し、これからの作戦というか、方針を定めて伝える。アルビレオなら、色々と事情を知っているので何とかしてくれるだろうと踏んだのだ。

「このままでは連合軍の手で帝国軍は壊滅必至じゃろう？」

『そうですね、遺憾ながら』

「じゃろう？　そこで頼みたい事がある……帝国兵士を一人残らず、海に叩き落として欲しいんじゃない。何なら、橋を落としても構わん」

海に落とす、何の為に？　そう問いかけるアルビレオは疑問に思った。

かなり無茶をする方法ではあるが、帝国兵を殺す事無く、連合の捕虜にもさせず、それでいて連合の人間も殺さない。誰ひとりとして殺す事無くこの場を収める策はその方法以外思いつかなかった。

説明し、その事を理解したアルビレオは驚き半分、呆れ半分で返答した。

『そう言う事ですか。…………すると、私も結構な重労働じゃないですか。高く付きますからね?』

「すまんの、他に策があれば良いんじゃないが」

『仕方ないでしょう。まあ、こちらは過剰戦力気味ですから、詠春をそっちに送りますよ』

恩に着る、最後にそう伝えて念話を終えたゼクトは、帝国兵士を海へと叩き落としながら、相変わらず突き進んでいた。

その進む先はウエスペルタイア王国。
彼の生まれ故郷だ。

一方で分断された橋の西側では、ゼクトの陽動とナギの『千の雷』を発端とする連合による『グレートブリッジ奪還作戦』は順調に、連合軍は快進撃を続けていた。

帝国軍兵士は橋から逃げる事が出来ず、魔法を放てば誰かに当たるといった状況だ。連合軍兵から見れば、もはや『敵』というよりも『的』となっている。負ける方が難しい。

そんな連合にとってはゲーム感覚、帝国にとっては地獄のような光景の最中。アルビレオはゼクトからの念話を受けて動き始めた。勿論、帝国兵を薙ぎ払いながらだが。

「全員注目、ゼクトから連絡です。この戦いで私達の大まかな方針が決まりました」

次の瞬間、紅き翼一行はアルビレオの元に瞬時に移動した。その際、何人もの帝国兵が吹っ飛ばされたが、些細な事である。

「詠春はゼクトを追って東側を、ナギとラカンはココ、西側を攻めて下さい。作戦内容は単純明快、あらゆる手段を用いて、帝国の兵士を一人残らず海に落とす。ただそれだけです……何なら、登ってこれないように橋を落としても構いません。ただし、絶対に殺さない事。それから、連合の兵士は海に落とさないようにしてください」

「む、どういう事だよそりゃ。倒すんじゃねーのか？」

声を掛けられたナギは、疑問をそのまま口にしていた。その隣で、同じく詠春も疑問符を頭の上に浮かべていた。

全員を気絶させるなりして、無力化するというのならまだしも、ただ海に落とすだけ。2人は目的と手段が逆転しているのでは無いかと言っているのだ。

「ええ、海に落とすだけです。殺したり、大怪我させなければ

手段は問いません。……それしか、彼らを救う術が私達には無いのです」

「救う……連合の兵士をか？ まさか、帝国にはこの状況を覆す秘策か何かがあると言うのか？！」

「いえ、そうではありません」

どこか悲痛な顔をして語るアルビレオに、詠春とナギは驚愕した。しかし、その問いかける内容はズレている。仕方ないといえば仕方ない。何せ、詠春もナギも、連合陣営としてこの戦争に参加しているのだから。アルビレオとは立場が、視点が違う。

そんな2人を前に、アルビレオは普段無い程に真面目な表情をして語る。

普段の胡散臭い表情など一片たりとも存在しない。その事から、アルビレオが語る内容がどれほど重要な事かを感じ取った2人はゴクリ、と息を飲んで続きを促した。

「このままでは大勢の帝国兵士が無残に殺されてしまう、という事です。それは”私達”の望む事ではありません」

「……アル、お前は——」

——帝国の人間なのか？

そう言い掛けた詠春を、ナギは片手で押し留めた。

「一つだけ教えてくれ。――アル、お前は俺達の味方か。それとも、敵か？」

「味方、なのでしょうね。少なくとも敵では無いでしょう。私達の目的はただ1つ……この馬鹿げた戦争を終わらせたい」

「……ふーん？　なら別に良いか。じゃあ、さっさと始めるとすつかあ……ああ、後で説明はしてもらうからな！」

言いたい事は言った、と満足気な顔をして、ナギは肩を回し、指を鳴らした。

そのままラカンの元へと走り、どちらが多く落とせるか勝負しようぜー、などと競争すら持ちかけている。切り換えが速いにも程がある、とアルビレオは思った。勿論、詠春もだが。

多少アルビレオの話に疑問を持ちつつも、残った詠春はゼクトの元へと向かった。律儀である。

何にせよ、これで戦いが終わるのならそれに越したことは無いし、それで人死に出ないのなら尚更だ。本当に殺さずに済むのかは疑問だったが、そこはアルビレオを信じる他無かった。

余談だが、3人がシリアスな会話を繰り広げている間。

ラカンはいさ少し離れた所で「マジかよ、橋壊して良いのか？」と、何所か楽しそうにアーティファクトで作りだした大剣を振りまわしていた。……要するに、特に何も考えていなかった。

詠春は、そんな自由気ままなラカンを見て、少しだけ羨ましく思った。

難しい事を考えず、ただ武具を振るう。それこそが彼の強さの秘訣なのかもしれない。

第9話 真・三国ゼクト無双（後書き）

漸く、オリジナル設定（捏造設定）の面影が出てきました。
……ほんの少しだけ、ですけどねー。

第10話 戦争に潜む影（前書き）

カッコイイサブタイトル付けてみました。

第10話 戦争に潜む影

ゼクトの陽動と、ナギの『千の雷』を発端として紅き翼の奮闘により戦線は大きく動き、最終的に帝国軍はウエスペルタイア王国から撤退、グレートブリッジの中央付近まで連合軍は戦線を進める事となった。

……と、言うよりも、連合軍はそこまでしか進めなかった。王国へと続くグレートブリッジそのモノが中央で破壊、分断されており、それ以上進む事が難しくなっていた。勿論、ナギの『千の雷』の被害だ。

これは、メセンブリーナ連合から見ればウエスペルタイア王国を取り戻した……という形になるのだろうか？

「——むしろ、王国が自治権を取り戻した、が正解かの」

「ですねえ。帝国だけなら別に構わないのですが……帝国領という事になっていると、連合が煩いですからね」

そう言って、あーやだやだ……と肩を竦めるのはアルビレオだ。ゼクトとアルビレオは2人、王国の海岸に建設された防波堤に佇んでいる。

視界に映るのは、朝焼けで黄金色に染まった海と、至る所から煙を上げる半壊したグレートブリッジ、そして浮遊する連合軍の戦艦だ。

連合軍は陸路以外の手段、即ち飛行戦艦を用いて王国へと進む。陸路は橋が落ちており通行不可、海路はそもそも船を持ってこないからだ。

……とは云え、王国へ直接乗りこむ戦艦は少ない。どちらかと言うと破壊された橋を修復する為に飛んでいるモノが過半数だ。

グレートブリッジは王国と連合を繋ぐ、最短にして最良の道だ。海で分断された二国間での貿易は、この橋を渡るか空路しか無い。海路という手段もあるが、海獣などによる被害を考えると陸路の方が遥かに安全であるし、そもそも橋の横を船で進む意味が無い。

そして、多量の物資を運搬出来る飛行船は燃料などの運用だけでなく維持費も多額と成る為に、主な輸送路はグレートブリッジを利用した陸路と成っていた。

……そもそも、橋の両端に入国審査と検閲所があり、そこに一度降りる必要がある為に空路でも道筋が変わらない、という理由もあるが。

何にせよ、その貿易上で重要なグレートブリッジの修復は最優先事項として扱われて居た。

この橋の有無によって、市場価格の上下が決まるのだ。帝国と敵対する連合諸国には、魔法世界内で貿易出来るのは橋で繋がる王国と、同じ連合加盟国、そして遠く離れた南の大陸『龍山』地方だけだ（また、龍山地方も王国を通るルートが最短である為、やはり市場価格に関わる）。

帝国軍は1人も居らず、あるのは橋の到る所に残る闘争の傷跡だけ。

そう、帝国軍は影も形も無い——死体すら存在しない。

グレート＝ブリッジから視線を逸らし、「これから忙しくなるの」と独り言ちて、アルビレオを連れ、来た道を戻る。

「おーい、御師匠ー！」

正面、こちらへ歩いてくるのはナギだ。その背後にはラカンと詠春も居る。

今回の作戦での活躍を評し、恢の勲章と表彰を受けていたのだ。

これ程までの大規模な作戦、当然のように広報関係者が戦場に居る事も可笑しく無い。むしろ居て当然だろう。前線の状況を国民に知らせ、自分達の勝利を知らせるのは国の活気に関わる。

ちなみに、ゼクトとアルビレオは「面倒」「恥ずかしい」と言つて辞退した。

理由は勿論でつち上げた適當過ぎるモノだが、記者達は「謙虚なんだな」と好意的に解釈した。一応、写真は1枚だけ撮影させられたが。

「なあ御師匠、結局アレは何だったんだ？ 海がすっげえ光ってたヤツ。あれ、御師匠の魔法だろ？」

ナギが言うのは今回の戦い、最後の最後で発動した超々大規模術式の事だ。その効果範囲は、グレート＝ブリッジ全域をカバーする。

より正確には、その周辺の海が効果範囲である。

紅き翼はゼクトからの言葉通り、帝国兵を次々と海へと叩き落とし、戻ってこれない様に橋を所々破壊した。そして、帝国軍全てを海に落とした所で海が光り輝き——次の瞬間、帝国軍は跡形もなく消失していたのである。

「光ってたって事は……雷系統の魔法か、一瞬で人間が消し飛ぶ程の威力の？　でも御師匠は人殺し厳禁って言っしなあ……あー、マジ解んねえ！　教えてくれよ！」

そう言つて、ナギは地べたに座り込む。完全に「教えてくれるまでデコでも動きません」な状態だ。

ラカンや詠春も興味深そうにゼクトへと視線を向けていた。説明待ちである。それぞれ訊きたい理由は違うだろうが、目的は同じだ。

仕方ない……と呟いて、ゼクトは何所からともなく、巨大な黒板を取り出した。そう、ゼクト先生の魔法講座である。

眼の前に突如出現した卓袱台に、ナギは素早く筆記具とアンチコを並べた。完全に調教されているが、気にしてはいけない。

「さて。まあ御主が言った様に、あの光が帝国を消し去った要因なんじゃが……言ってしまうば、大規模転移術式じゃな」

「転移？　じゃあ帝国兵は死んだんじゃないくて、何所かに飛ばされただけなのか？」

「その通り、転移先は……帝国、その中心である帝都ヘラスの周辺

に広がるヘラス海じゃ」

ヘラス海とは、その名の通りヘラス帝国内にある海……地中海だ。ちなみに地中海とは、大陸で囲まれる事で外海との水の対流が殆ど無い海域を指し示す——つまり、口が殆ど閉じている湾である。

「帝国の首都だと？！ 滅茶苦茶遠いじゃねえか！」

「そんな遠いのか？」

それに対し、ラカンが大きく反応した。仮にも帝国生まれ、帝都がココからどれ程遠いのか、良く知っているからだ。

隣で魔法世界の地理をあまり覚えておらず、どれ程遠いのか解らないナギは首を傾げた。

ゼクトは地図を取り出し、説明を続ける。

「現在位置であるグレートブリッジがココ、そして帝都ヘラスは——ココじゃな、大体6千キロメートルといった所かの」

「6千キロメートルね……とりあえず、スゲー遠いつてのは解った。……でも、何でそんな事したんだ。やっぱ相応に魔力使っただろ？」

「うむ、お陰様で貯蔵してあった魔力が殆ど空じゃ」

「……あの人数を長距離転移させるなんて、一人で出来る時点で十

分可笑いと思うんだが」

「それについては、また今度話すでしょう。さて、ここで問題じゃが……帝国軍が長距離転移した今、連合と帝国はどう動く？」

うーん、とナギは思考を巡らせる。

「どうだろうな……また何所かで大規模戦闘でも起きるのか？　グレートブリッジは今回の戦いで警戒されてるだろうから、アルギユレー辺りで。今度は連合が攻める側だな」

「……ふむ、御主はそう予測するか。ちなみにワシの予想は、両者膠着じゃな」

「そりやまた、何でだ？　帝国は兵士こそ殆ど減って無いけど戦艦とかはボロボロだぜ。それに比べて連合は殆ど無傷、攻め込み放題じゃねえか？」

なるほど、とゼクトは思った。確かに帝国軍は戦艦や、鬼神兵などの戦略兵器を多数失い、直ぐに立ち直る事は出来ない。確かに攻めるチャンスだ。

しかし、それは第三者として色々『知っている』からだ。

……連合軍は、帝国軍がどのように、何所へ消えたのか。それを知らない。

「つまり、連合は一瞬にして何所かに消え去った帝国軍の行方を調査、警戒せねばならん……そして、もしも転移先が連合陣営の中樞、メガロメセンブリアの付近などだったら？」

聞いていた3人はハツとした。

敵が、それも10万を超える大軍が、何所に居るのか解らないのだ。

「帝国軍が大規模転移魔法を用いてグレートブリッジを占拠した事を連合は知っておる。つまり、帝国が再度大規模転移したとしても、可笑しくは無い訳じゃな」

「へえ、つて事は消えた帝国軍の行方がハッキリするまで、連合軍は動けない———それどころか、本国に戻らねーとヤバイって訳か」

「お陰で、この戦争に関わる各国———特に、戦場となっていたウエスペルタイア王国には時間的猶予が与えられます。この猶予を有効活用する事が出来れば……」

「———戦争を止められる、のか？」

言葉を継ぎ、ナギが答えた。

アルビレオも、ええ……と頷き、何か言いたげなナギを促す。

「なあアル、この作戦の最初に言ってたよな、馬鹿げた戦争を止めたい———つて」

「言いましたね。また、後で説明する、とも約束しましたが」

「……お前はまた勝手な約束をしておって」

「良いじゃないですか。その内、彼らも知る事でしょう？　むしろ、今から知っている方が余程良い」

ふん、と一息付いて、半ば呆れる様にゼクトはアルビレオから視線を逸らし、ナギへと向けた。

強い意志を秘めた視線を受け、ゼクトは続きを促す。

「旧世界には大規模殲滅魔法を越える威力の科学爆弾が発明されて、この戦争みたいな大戦は起こらねえらしい。……手を出した瞬間、相手にその爆弾を使われたら自分達が滅んじまうかだ」

俯き、苦々しさを隠さずに語る。

旧世界は平和に見えるが、それは表面上のモノだ。一種の恐怖統治と言っても良い。事実上、一方的に相手の兵器を無効化するなり、さらに高性能な兵器が開発されるなりすれば、戦争が再発する可能性を孕んでいる。

……それに、旧世界にも魔法使いは居る。この戦争があつちに飛び火しないとも限らねえ。

「だが、この戦争は何だ。連合が帝国に攻め込んだと思ったら、次

は帝国が帝国を押し返す。それを交互に、交互に。やる気になりや、今回帝国が使った大規模転移魔法みたいな、一気に戦果を上げる魔法はあるし、それどころか遣ろうと思えば都市を吹き飛ばすような大魔法だってあるだろ」

今回の作戦はゼクトの起点で事実上の一時停戦状態に持ち込んだが、それも長続きしないだろう。

これまでも停戦、休戦する機会があったのに、それを無視するようにならないうに戦争は続いた。

「この戦争は何時終わるんだ。どちらかが滅ぶまでか、戦争が出来なくなる程に国が弱まるか……」

「確かに、いくら連合と帝国がデカいと言っても、こんな長期間戦争を続ければ物資が足りなくなるだろうな」

「そうだ、戦闘が起きれば兵士が、人が死ぬ。俺も帝国の戦艦や鬼神兵をいくつも落とした……俺1人で国相手に被害が出せるとまでは言わねえけど、それにしたって異常だろ。他の戦場でも艦隊同士の撃ち合いなんかで減ってるハズだ、それなのに常に戦力が一定、減った分だけ、どこからか補って来てる。連合も、帝国も……まるで――」

「――まるで、戦争を態と長引かせているかのようだ。ですか？」

アルビレオが繋ぐ。ナギはそれに頷き、

「ああ……でもお互いに戦争を続けても良い事なんて無いハズだ。戦争特需とか言うのもあるが、それだつて一部だけで全体で見ればマイナスばかり、良い事なんて殆ど無え。……このまま戦争がいつまでも続けば、魔法世界が滅亡しちまうぜ！」

「——ある意味、その通りかも知れないぞ？」

ナギの背後、グレートブリッジから歩いて来る男が言った。

「ガトウ、追いついたのか！」

「ああ、まさか追いついたと思ったら既に戦闘が終わってると思わなかった。全く、お前らの実力は想像以上だな……」

呆れたように呟くのは、ガトウ・カグラ・ヴァンテンバーグ。少し前に別れた、新しい仲間だ。

ふう、と煙草の煙を吐き、一息挟んでからガトウは懐からいくつかの書類を取り出し、

「俺達がお前らに接触したのは、グレートブリッジ奪還作戦を伝える……というのも合ったが、それは後から追加された仕事でな。本来の仕事は別にあつたんだ」

「おい、これって……？！」

渡された書類に書かれていたのは、兵器などを売る戦争商売組織。そして——魔法世界各国の上層部に潜む、それら組織との関係者のリスト。

「奴等は帝国、連合、双方の中枢に入り込んでいる………秘密結社『完全なる世界』だ」

第10話 戦争に潜む影（後書き）

やっとここまで来ました……ガトウ最大の出番でしたね！（酷
さて、そろそろ盛大に原作ブレイクというか、既にブレイクして
いるというか、作者の妄想ネタが炸裂し始めます。

次回辺りから読者が増えるか、減るのか……ふふふふ、ぎゃんぶ
る！

●おまけと言う名の蛇足

「……そう言えば、俺達が転移してからそれ程時間経ってないんだ
が。お前らどうやってココまで来たんだ？」

「ん？ ああ、ただ走って来ただけだ。仕事柄、逃げ足には自信が
あるんでな」

（……………コイツまでバグキャラか……………ッ！！）

第11話 王国王女殿下（前書き）

今回は、かつてない程短いです。

え、何。普段からこんなもん？ そっぴやそっぴだった！

1話を長く書こうとすると、どうしても筆が進まなくなるとい
か、何か速度が遅くなるので、途中途中でどんどん上げる方式に
してみたいと思います。

……うん、前にもそんな事言った気がするね。

第11話 王国王女殿下

グレートブリッジでの激闘からさらに数刻。

紅き翼一行は戦闘の疲れを癒す為に、ウエスペルタイア王国首都、王都オスティアの高級ホテルの一室で羽を伸ばしていた。

ただし、ココに居るのはナギ、詠春、アルビレオ、ゼクト、ラカ
ン、タカミチ、以上6名だけだ。

残り1人、ガトウは「お前らと会わせたい人が居るんでな、ちょっとアポ取って来る」と言ってお出で行ったので居ない。普段は彼と二人セットで行動しているタカミチがこの場に残っているのは、連絡を中継する為だった。

ガトウが戻って来るまでの間待機となったが……徹夜での戦闘後という事もあって泥の様に眠った。

……眠ったのだが。慣れない環境で寝付けなかったか、或いは高級ホテルは疲労回復速度まで高性能なのか。暫くするとほぼ全員起きだして思い思いに行動を開始していた。

「おいタカミチ、すげえぜこのベッド！ 見ろ、飛び乗ると滅茶苦茶跳ねるぞ！？」

「この部屋、ワインセラーまで付いてるのかよ？ 流石は高級なだけあるな——そして、美味い」

「恥ずかしいからやめろ馬鹿、壊したらどうする？！ ってラカン、勝手に飲むんじゃない。その酒は後で料金取られるタイプのサービスじゃないだろうなあ？！」

未だに眠っているのはゼクト、アルビレオの2名だけである。

疲労回復した馬鹿2人がはしゃぎ回る横で寝続ける辺り、こいつらも大概図太い。

そこまで神経が図太く無かったタカミチはそのそと起きだし、寝汗によって失った水分補給と眠気覚ましを兼ね、コップ一杯の冷水を飲み干し、ふう……と息を吐いた。

……………この人達、本当に僕より年上なんだろうか？

所替わって、ココは王都オスティアの中心部。強固な要塞の如く聳える王城の正面玄関口から100メートルも離れていない建物――

オスティア会議場。

その2階廊下を進むのは、紅き翼一行だ。ガトウからの連絡を受けて合流した一行は、どうやら彼が言っていた「会わせたい方」へのアポイントメントが取れたらしく、その人物が控える部屋へと向かっている最中である。

このオスティア会議場は王国が建国された頃から、王宮が直接運営する由緒正しい国営施設であり、国民は格安で利用できる。

その設備は多岐に渡り、10人程度の小さな会議室から、1000人は入ると思われる大会議室、地下に広がる超巨大図書室や、終いには国民の戸籍・住所などを扱う役所としての機能まで含む。

それどころか、裏庭の様に広がる運動場まで保有し……とりあえず、何かと便利な施設なのである。

「——で、ガトウ。結局、俺達に会わせたい奴つてのは誰なんだ？」

「まあ、慌てるな。この扉の先でお待ちだ」

どこかそわそわと落ち着かないナギを嗜め、廊下最奥に位置する小会議室前で止まる。

扉を軽く叩くと、入れ……と声がした。女の声だ。

「ヴァンテンバーク、彼等が——？」

「ええ、彼等こそが以前王都へ迫り来る帝国軍を、並びにグレートブリッジを占拠する大軍を退けた『紅き翼』です、王女殿下」

彼等を部屋で待っていたのは2人。

腰かけていた椅子から立ち上がり、こちらへと視線を向けるのは、金系の髪を腰程まで流した、簡素なドレスを身に纏う少女。

その左手後方、控える様に佇むのは、蒼い髪を背中まで伸ばした、

皮鎧の様な衣服を身に着けた女性だった。

…… ウェスペルタティア王国王女、アリカ・アナルキア・エンテ
オフュシア。

そう名乗った金の少女は数歩前へと進み、紅き翼と対峙する。
どうしたものか、と動かない彼等の間で緊張が走る中、最初に口
を開いたのは当然のように彼女だった。

「主らの実力を見込んで頼みがある。……この戦争を止める為に、
私にその力を貸してくれぬか」

第11話 王国王女殿下（後書き）

という訳で、皆大好きアリカ様登場です。

原作ではメガロメセンブリアの首都で紹介されてましたが、この世界では王国首都です。

……あ、ちなみに一緒にいた女性はオリキャラですが、オリ主さんでは無いですよ。強いけど。

●ガトウとタカミチの連絡手段。

専用の長距離通信用の魔法具（魔法型トランシーバ）を用いている。

旧世界から取り寄せた機械式の携帯型トランシーバも持っているのだが、長距離間や遮蔽物越しでの通信には向いておらず、使えない。

魔法型トランシーバも魔法的な障害で通信不可に陥るが、それでも物理的な壁は素通り出来るので、とても便利。

当初はタカミチとガトウは仮契約をしていて、タカミチのあの少年スーツがアーティファクト（簡易装甲服）という設定を考えていた。

ただ、契約カードの通信距離はそれ程長く無いし、そもそもあまり妨害出来る（公式設定）。それ所か諜報員が個人同士の繋がりを辿れるような代物を持つてちゃいかんだろ、という事で、廃案となった。

●国立オスティア会議場

超捏造施設。地上2階、地下不明の巨大建造物。

当初は役所機能と図書室、そして会議室しか無かったが、度重なる増改築で巨大化したとか何とか。真帆良学園の図書館島は、この超巨大図書室をモデルにしたとか、そんな割とどうでも良い設定。

もはや、あまりにも巨大すぎて図書室と言うよりも、図書保管区とでも呼んだ方が良い気がする。

……実は王城よりも古い建物だった。

第12話 オスティアの夕暮（前書き）

連日更新というモノに挑戦してみた。

……いや、この話って11話のオマケみたいな感じだから、あまり更新って感じ無いですけど。

そして、恐ろしい程に話に中身が無い。そして短い。

第12話 オスティアの夕暮

現在ココ、王都オスティアは静かだ。

空は薄暗いが朝早い訳ではない。今は、夕暮れだ。

しかし時間帯の割には――街並に人影がない。確かに人は暮らしている。家々からは人が暮らしている事を示す灯りが漏れている。つまり、戦時中故にあまり出歩いて居ないのだ。見掛けても、精々警備兵程度か。

……戦争が終われば、活気も戻るだろうか。

静まり返った街並みを眺める詠春は、

……戻る。いや、必ず『戻す』。

愛刀である夕風を撫で、決意を新たにした。

「ワハハハハハッ！ 上手い事やったなあこのガキヤ！ 逆玉か、逆玉なのかー?!」

「ああ?! 何の話だこの馬鹿、って痛え、放せコラア！」

「おめー、そりゃアレだよアレ。お姫様とイチャイチャチュツチュしてただろーが！ 俺なんて、気安く話しかけるな下衆が……だぜ

「？」

そんな詠春の後ろで騒ぐのは馬鹿2人だ。

フツ……と、目元に影を作り、アリカのモノマネ（らしきモノ）をする。……が、似ていない。実に似ていない。本人に見られたら間違い無くブン殴られるだろう。

一方でナギは、そのラカンに頭をわしゃわしゃと撫でくり回され——というより、首を振り回されて——誰もチュツチュなんてして無かっただろうが！……と、暴れていた。

「あーん？　じゃあイチヤイチヤしてた事は否定しねえのかよ。ヒューッ、やるねえ！」

「うがああああ！　こいつ、ウゼエー?!」

（……………仲良いなあ、あの2人）

街に人影が見えず、寂しげではあるが……

そんな中で、馬鹿2人がわいわい騒ぐ様を見ていると、世の中が平和なのではないか、と錯覚する。

詠春の隣に立つアルビレオも同じ心境なのか、眉尻を下げて（普段通り）、何所か困った様な表情でそれを眺めていた。

丁度そこに、

「戻ったぞ——これは如何言う状況じゃ……ああ、いや。大体解

「だから説明せんでも良い」

「ふむ、その様子だと用事は無事済んだ様ですね？」

先程まで居たオステイア会議場に残っていたゼクトが戻って来た。うむ、と頷いて返すその表情は何所か晴やかであり、自信に溢れていた。

「そっぴや御師匠、何所行つてたんだ？」

「何、マリアに用事があつたんじゃよ。アレとは昔からの馴染みでこの、此処暫くは会う事が無かつたのでな、積もる話もなんとやら」

「マリア……っつと、あの姫様の後ろにいた蒼髪の穰ちゃんか。結構デキる奴って感じがしたが、まさかゼクトの知り合いとはな」

ラカンが言つた通り、マリアと言うのはアリカ王女御の後ろに控えていた女性の名前だ。

冷静沈着、クールな装いから滲み出るカリスマ性は、アリカ程では無いが、目にする者を惹きつける。

——余談だが、ラカンが言う「デキる奴」とは、当然の様に戦闘能力の有無を指す。

「ああ見えて、アレは長寿でな。ワシ程では無いにせよ、案外長い付き合いなんじゃよ……確か、アリカ王女の教育係も務めておつた

とか聞いたぞ」

「へえ……すると、王女様の鉄面皮っぷりはその影響か？」

さあの……と返したが、内心ではゼクトもそんな気がしていた。
マリアは鉄面皮と言うよりも、身内とそれ以外への対応の違いが
凄いのだ。すると、案外アリカ王女もそうかもしれない。

普段は冷静沈着。他者と線引きをして一定以上近付けまいとする
拒絶オーラ。

しかし、仲間や家族などの身内相手では本当の姿を見せる（勿論、
優しい顔だ）。

「——ふむ、アリカもしれん」

「は、何が？」

「あ、いや……うむ。何でも無いぞ？」

ゼクトは冷や汗を垂らし、

……あ、危うくワシの威厳が崩壊する所じゃった。

もう少し格好良いキャラで行こう、と決意した。

第12話 オスティアの夕暮（後書き）

話の途中に出た「マリア」は、まあ本文中でも言う様に11話でアリカの後ろに居た人です。

オリキャラですけど、主人公では無い。ってこれ前にも言いましたね。

青髪ロングでマリアなので、解る人には正体が解るかもしれませんが。

（本編中で活躍するかは不明ですけど）

第13話 閑話、裏方の私達（前書き）

連続更新ってスゲーよな。

だって、更新予約がたっぷりだもん。

第13話 閑話、裏方の私達

「『鍵』は、補充完了しとるかの？」

「私を誰だと思ってるんよ、当然でしょう」

そう言つて、私は彼に『鍵』を渡す。

代わりに、彼は私に空となった『鍵』を渡す。

私の仕事はこの鍵を護り、常に使える様に維持する事。昔は違うけど、今はそうだ。

……にしても、これ一杯に魔力を溜めるのがどれだけ大変か解つてるのかしら。

この『鍵』だって、大魔法を何百発も連射出来る程の魔力が込められていたハズなんだけども。

そんなに無茶な事をやらかしたのか。それとも無駄遣いしたのか。

……とりあえず怒っておけば問題無いでしょうし、

「全く、後先考えずに消費するからこうなるのよ」

「耳が痛いもう……しかし、あの時点で他の手なぞ無かつたじやろう。人が死ねば、それだけ不幸や憎悪が増える。戦争が終わらなくなる」

「……確かに、あの人数が死ねば戦争は泥沼化したでしょうね。友

人や家族を殺された恨みは、そう簡単に晴れるものではないから」

この男は恐らく、私達の中でも最もこの戦争を終わらせたがっている。人間を、文明を愛していると言い換えても良い。いやこっちが本命？

昔は、それ以上に人間好きなヒトが居たらしいけども、私は会った事が無いし。今は居ない——いや、眠っているんだっただけ。

「感謝するぞ、これでまだ戦える」

「全く、無駄遣いはやめなさいよ？ それ、最後の1本なんだから」

「……これでも最小限の消費で遣り繰りしてるんじゃないの？」

……確かに、貴方の術式構成は世界最高でしょうけども。

「そう言う問題じゃなくて、仲間を使えって言うてるのよ。最前線に出る必要なんて無い、貴方はトップでしょう？」

「トップとは言っても代理なんじゃが……」

「でも、長いことやってるでしょう——確か2500年？」

「惜しい、2600年じゃ」

「細かいわね——それとも何、未だにあの事を気に病んでるの

かしら。だとしたら女々しいったら無いわ」

「……………むう」

……………どうしてこう、この男は『仲間を頼る』って事になると迷うのかしらね。

私なんてバシバシ使うのに、と呟くいたらジト目で睨まれた。使える物はガンガン使うのが上司でしょうに。……………上手いこと使わないと降ろされるけど。

まあ、こんな所でうだうだ話しても何にも成りはしない。成果を得たければ、只管前に進むべし、ってね。

「ほら、さっさと行った行った。貴方の『仲間』が待っているんでしょう？ 使いきった『鍵』は補充しておくから、貴方は貴方のやる事やってきなさい。終わらせるんでしょう、この戦争を」

そう言つて、私は文字通り彼の尻を蹴り飛ばした。

丁度良い高さにあるのが悪いのよ。そう、私は悪くない。

「痛あつ……………全く、年上は敬えと習わんかったのか？」

「そんな事知らないわ。生憎、私が生きてたのは実力主義の世界だから……………むしろ、立ってる者は親でも使えとは言われたけど」

事実、『出来るか出来ないか』だけの世界だったから。

まあ私が最後の一人になった現状、ぜんっぜん関係無いけども。

「まあ、貴方は殺しても死なないような存在だけど、精々死なないように頑張って来なさい。私達もバックアップはするわ」

「そこまで言われてはやるしか無かるう。……まあ、ワシが死んだ時は頼むぞ、マリア・T・フラメル——最後の、錬金術師」

パタン、と音を立ててドアを閉じる。

何か格好付けて出て行っただけども、厨二病でも拗らせたか。それとも、歳取るとああなるのだろうか。死亡フラグっぽいまで立て行っただけども。

まあ、その死亡フラグも無意味だけども。

殺しても死なないし、死んでも生きてる……そう言う存在だから、あの男は。

「行ってらっしゃい、フィリウス」

——私は私で、やるべき事をやるわ。

まずは、そう。あの御転婆姫の護衛。見た目はクール装ってる癖に、放つとくとスグどっか行くし。ホント、誰に似たのやら。

……もしかして、私が育て方間違えた？

第13話 閑話、裏方の私達（後書き）

……と言つ訳で、今回は、第12話の裏側的な話でした。

今迄に張った色々な伏線を回収しつつ、ネタバレしつつの伏線バラ撒き。

この伏線、回収しきれるのか。

——そもそも、伏線になつてるのか？（酷

まあ何にせよ、漸くオリ主さんの影が……見えてきてると良いなあ。

第14話 「やったか?!」はやってないフラグ。(前書き)

好き勝手書いたら、何か思わず筆が進んだ件。
如何言つ事なの? …… あ、いつもの事か。

何にせよ、これで4日連続更新です。

…… P V 数とか、これでどう変化するのか楽しみだったり。

第14話 「やったか?!」はやってないフラグ。

「あー、暇だ。ヒマヒマー」

欠伸を噛み殺しながら、広い廊下の中央を歩く少年が居た。

廊下の壁際には、如何にも名のある芸術家が創りました、と言った風情の絵画や壺など、うっかり触って壊したりしたら大変な事になりそうな代物が飾られて居た。

——正直、貴重なモノだったらケースに入れるとか、嚴重に金庫などで保管して欲しいんだけど。

そんな無体な事を考える彼の性はスプリングフィールド、名はナギと言う。要は赤毛の魔法馬鹿である。

廊下のだ真ん中を歩いているのも、うっかり何か壊したりしたら何言われるか解らないからである。怖いモノ知らずと言っても、怖い時は怖い。

ここはオスティア、正確にはその付近にある浮遊小島とも呼ぶべき王家所有の地に建造された離宮だ。

空から見れば、巨大な丁字型になっている。……ちなみに、玄関口は『丁字』で言う所の右上の先端部だ。右下が庭園で、左下が裏庭になる。

ただ、この離宮はオスティア郊外と繋がる唯一の橋と、飛行船等を使う事でしか行き来出来ない。つまり交通の便は悪く——どちらかというと別荘だ。

現在、ナギ率いる紅き翼一行はこの別荘を拠点に活動している。
何故こんな所に彼らが居るかと言うと、『完全なる世界』の情報を得る為の拠点として、アリカから貸し出されたからだ。

元々、この別荘はアリカの……というか、ウェスペルタティア王家の所有物であり、それ以外の人に来る事は無い。

一応、長期の来賓の為の宿泊施設でもあるのだが。

……戦争中である現在、被害復興や国民への補償の為に現王は政務で忙しく、来客も無いだろう。

そもそも、来賓と言うのも帝国の王家などだ。戦争中にこちらへ来る事は無い。

しかも、ヘラス帝国とメセンブリーナ連合の間に位置するウェスペルタティア王国、その中心に位置する王都オスティアに近いこの別荘は、連合・帝国どちらに向かうにしても丁度良い立地だった。

そして何より……古来より帝国と交流のある王国では、人間以外にもヘラス人など、亜人が少なからず生活している。

彼ら紅き翼は、帝国領内ではナギ達『人間』が目立ち、連合領内ではヘラス族であるラカンが目立つ。お陰様で人間と亜人、両方が暮らす王国は堂々と街を歩く事が出来、大変活動しやすいのだった。

……いや、ラカンの巨体はヘラス族の中でも目立つし、ファンクラブもあるので、人に囲まれたりもするのだが。

「暇だ。兎に角暇だ。……ガトウとタカミチだけじゃ無くて御師匠やアル、それどころか詠春までアイツらの調査だもんなあ、ラカンも『クールで知的な俺様は、この別荘で優雅に……』とか意味不明な事言っただけで寝てやがるし」

頭脳労働が出来る面子は全員『完全なる世界』の調査に出ている。
……まあ、元々その為にココを拠点にしているのだから、当然と
言えば当然だろう。

また、彼等に協力を仰いだアリカ本人も、この別荘に滞在する事
がある。

諜報活動によって得られた情報を聞きに来る他、王家の一員でな
ければ不可能な事を請け負っているからだ。……例えば、王国の兵
士によって封鎖された通路の通行手形発行だとか。

「それにしたって暇だぜ。最初は身体を休めるついでにココの防衛
だとか、姫さんの護衛だとかの仕事があったから張り切ってたけど
よー……1週間も何も無いと、流石に休むだけってのも辛いぜ」

暇を持て余しなあら、ブツブツと呟きながら歩く。

そもそも、この散歩の様な暇つぶしも、一応は管内警護と言うか、
不審人物や不審物の有無を見て回っているのだ。とは云え、やはり
1週間何も無かったので暇である。

廊下の突き当たりまで進み、何も無い事を確認したナギは、来た
道に戻ろうと振りかえった。

……その時、視界の先。自身が立つ廊下の反対側、玄関ホールへ
と駆ける影を見た。

遠目だった為にハッキリとは確認できなかったが、白いローブを
身に纏い、フードを目深に被っていた。当然顔は見えなかったのだ

が、実に怪しい。

……あの格好はアルビレオだろうか。そう考え、即座に否定する。先日、というか昨日アルビレオが言っていた言葉を思い出した。

『ちよつと帝国まで情報収集行つて来ますね。とある亜人に協力して貰いまして……アーティファクトでその方に変身していれば、帝国でも普通に歩きまわれますし。というか、私にしかできないでしょう、帝国での諜報活動……。ラカンにやらせる訳にもいきませんし』

——確か3、4日は戻らないって言ってたよな。つまり、侵入者か！

判断を下してから早かった。

出来るだけバレない様に、足音を殺しつつダッシュする。滑るような動きで廊下を端から端まで駆け抜け、丁字路まで到達する。

怪しい人影が消えた方向、つまり玄関口を見れば——丁度、扉が閉まるうとする所だった。

——扉が間にあるから、白い奴からこっちは見えない！

扉まで一直線に走る。相手に悟られずに全力移動出来る今はチャンスであり、同時にピンチでもあった。

一度扉が閉まりきってしまえば、ドアノブを捻る音で気付かれるかもしれない。慎重に開けば音は出ないだろうが、その間に逃げられるかもしれない。

——もう少し……。届け、届け……。届いた！

急ブレーキを掛け、扉への衝突を防ぐ。

同時に、へばり付く様にして扉が閉まる事を防ぎつつ、開いている隙間から外の様子を確認する。

こちらに気付いている様子は無い。辺りをキョロキョロと見回しながら、コソコソと歩いていた。やはり怪しい。

—— よっしゃ、気付いてないぜ。……これなら『生け捕り』で
きるな！

頭の中で『白い奴』を捕まえる算段をする。

—— 最初は捕縛と武装解除どちらが良いんだ？

捕縛魔法と武装解除、前者も後者も名前の通りの効果で……前者が相手を拘束する魔法、後者が装備を解除させる魔法だ。

ただ、その2つの魔法には内容以前に大きな違いがある。それは

—— 詠唱の有無。

捕縛魔法は、相手を拘束する為の制御が必要で、当然呪文がある。ゼクトから「呪文は不要」と言われたが、ナギはその境地までは至っていない。

炎や風など、属性によって様々ではあるが……基本的に檻や拘束具を作り、相手の身動きを封じる魔法だ。

それに対して武装解除は、呪文詠唱が一切必要無い。馬鹿に優しい呪文である。

属性を込めた魔力を叩きつけ、魔力を持つ物体、つまり『肉体』以外へと浸蝕する魔法だ。風ならば吹き飛ばしたり、炎ならば焼き尽くしたりと、属性によって過程は様々だが……兎に角力任せに打

ち込んで確り効果が出る。

捕まえる事を優先するなら、取り合えず捕縛魔法で拘束、すかさず武装解除を放つのが良いだろう。

だが、それは一般的な魔法使いに關しての話であり、ナギには当てはまらない。言つてしまえば、捕縛魔法を上手いこと発動させる自身が無かつた。

——どうする、一か八かで捕縛魔法か？ それとも武装解除か。アイツが魔法使いなら発動体さえ無くなれば楽だ……でも瞬動とか使えんとすると、詠唱中に逃げられるし。

こんな事なら、捕縛魔法くらい勉強しときゃ良かったかなあ、などと思いつつ……ウンウンと悩んでいた所で外に変化があつた。

——走りだした？！ 気付かれたか……いや、早く離れようとしてるのか！

こつなつたら悩んでいる時間は無い。

扉を吹き飛ばすように押し開けながら、右の拳を突き出して魔法を放つ。

大きな音を立てた為、当然気付かれてしまった。相手も振り返り、驚いて口を開いている。

咄嗟に左腕を此方へと伸ばし対応しようとしているが……時既に遅しだ。

選んだ魔法は当然、詠唱無しでも発動可能な、

「——迅雷・武装解除！」

「……………ッ!!」

それも、ナギの得意とする雷の属性。

そして何より、雷属性の武装解除は相手の得物に電撃を流し、一時的に痺れさせる事で手を放させる魔法だ。

——つまり、ついでに拘束も出来る！

ナギの右手から放たれた膨大な魔力は電気を運び、バチバチと音を立てて目標へと突き進む。

出来る限りの魔力を込められたこの魔法は並の障壁では防げないだろうし、仮に防いだとしても一瞬くらいは硬直するだろう。その隙に殴って気絶させれば勝ちだ。

眼の前の人物は、迫り来る魔法へと武装を解除されるよりマシと判断したのか……伸ばしていた素手を叩きつける。

バチィッ……と音を立て、電気ショックによって筋肉が収縮し、不審人物の腕が跳ね上がる。

——当たった！ なら、痺れてる今の内に……！！

「……………っへ？」

次の瞬間、飛び掛かるナギの顔面に、勢い良く右拳が突き刺さった。

第14話 「やったか?!」はやってないフラグ。(後書き)

ちよつと解説こーなー。

●迅雷・武装解除

雷属性の武装解除。電気を帯びた魔力を放ち、対象の持ちモノへと電流を流す。

結果、相手は痺れて道具から手を放したり、場合によっては機械的な装備を破壊したりも出来る。

欠点として、電気抵抗が高い物質には通用し辛い事が挙げられる。ちなみに、電圧は高いが電流極端に低いので、人体にそれ程影響は無い。心臓マッサージにも使える便利魔法。

……ただし、ペースメーカーの人に使うのはやめましょう。

何となく『迅雷』って頭に着けたけど、もっと良い名前を思いついたら変更するかも。むしろ、募集します。

……ああ、ちなみにこの迅雷っていうのは、『風花・武装解除』で言う『風花』の部分にあたります。アレは風と木属性の武装解除なので。この小説では、そう言う設定です。

最初は『雷電』とか『雷撃』書いてました。つまりサンダーボールト。

というか、語感が良い言葉があまり無いんですよ、電気って。末尾に着けたり、中間に挟むなら良い感じの単語一杯浮かぶんですけど、頭に着けるとなると……むーん。

今付けてる『迅雷』も、疾風迅雷みたいに末尾に着けるイメージですし。

第15話 謎の白い人物の正体とは？（前書き）

PV52 / 000 UA:10 / 000 突破しました！。
ありがとうございます！

好き勝手書いてたらマリアさんの出番が超増えてた。
おかしいな、この人脇役なんだけどなあ。

あと、相変わらず3 / 000字越えませんでした。むづ。

第15話 謎の白い人物の正体とは？

かつん、かつん……と、靴底を鳴らして廊下を歩くのは蒼い髪の女性。

ウエスペルタティア王国・財務監視課長兼、第一王女教育係兼護衛——名前を、マリア・T・フラメルという。

その役職通り、王宮内外での財務関係を監視・浄化する機関の長にして、アリカ王女の教育係と護衛もこなす。

仕事が多すぎな上にどれも重要な役職ではある。それでも一切の問題を起こす事無く、疲れも見せずにこなす事が彼女の呼び名、『蒼氷の女官』『しごとマシーン』『あの人、いつ寝てるの？』の由来だった。

……最後のモノは感想だが、彼女の仕事ぶりを見ると誰もが一度は思う事である。

とは云え、既にアリカ王女は「言われなければやらない」という年頃では無くなった。

しかし、それで仕事が減ったかと言えば、そんな事は無い。

アリカ王女には情操教育や芸術関係など、多くの教育係が付いていた。物心ついた頃から、ずっと。……たった1人の王女だからだ。だが幼少の頃からその才覚を発揮していた彼女は、次々とそれらの知識を吸収して行き——要するに、教育係の仕事が無くなったのであった。

故に、残った教育係はマリアただ1人。

彼女がアリカ王女に教える項目は数多く、専門である財務。さらには護身程度に戦闘技能や魔法技術まで叩きこんでいる。

現在の教育内容は政治であり、実際にアリカ王女自ら政務を行う事で身に付けて行く最中だ。ある意味、研修期間とも言える。よって、アリカ王女の傍に居る際のマリアの立場は秘書兼、教師兼、護衛という事になる。

そんな彼女の今朝の様子を見てみよう。
それは、夜明けと共に始まった。

半ば寝惚けつつ、柵からカップを取り出して水を入れ、魔法を用いて一瞬にして湯を沸かす。
旧世界から取り寄せた、湯に溶かすだけで飲めるインスタントコーヒーを指定通り投入する。

続いて、寝巻代わりのシャツをベッドに脱ぎ捨て、姿鏡の前に立ち、長い髪を梳って整える。

同時進行で、寝汗や目脂などの除去を。
本来ならばシャワーや洗顔を以て行う事を全て魔法で代用する。
武装解除のちよつとした応用である。

次いで姿鏡のすぐ隣にあるクローゼットを開いて、適当に掴み取る。
いくつかセットで並んでいるが、どれも全く同じ服だ。

真っ黒のタイトスカート、同じく黒いシャツ。どんな素材で出来ているのか不明だが、つやが余り無い。

……とは言っても粗末な見た目という訳では無く、品のある艶消しという感じだ。

その上から白のジャケットを羽織り、やはり白いマントをポーチ

等と共にベルトで腰に固定する。

最後に姿鏡で総身のチェックを行えば、それで完成である。

未だ熱々と湯気を立てるコーヒーを手に、冷ましながら飲み、意識を覚醒させる。

完全に意識が覚醒した処で、机の上に置かれた熱加工処理されたミルクを取り、残りのコーヒーに投下してシュガースティック（砂糖の棒塊）で掻き回す。

そうして出来たカフェオレ的な何かを片手に、一日のスケジュールを確認し、そして上がって来た報告を確認するのだった。

午前中は主に彼女自身の政務や、アリカ王女の政務の補佐を行っている。

昼食後、つまり午後からはアリカ王女の護衛を行ったり、稽古を付けたりといった仕事があるのだが……紅き翼と協力し、『完全なる世界』を追っている今は、違った仕事がある。

即ち、紅き翼による諜報活動で得た情報を整理し、また次の調査地の候補を探す。裏方的作業をガトウ・カグラ・ヴァンテンヴァーグと共に言い、そして裁決が必要な書類をアリカ王女の元へと運び、認証を得る事である。

……とは言え、実際の所やってる事は普段と変わらないのだが。

処理する情報が国内での金銭の動きから、世界レベルで動く秘密結社の情報になっただけである。

また、遙か昔にはアリアドネーにも在籍していた経験があり、その辺りのコネを使って物資の搬入なども担当している。

恐ろしい事に、それらは彼女のポケットマネーから支払われている。長生きと節制によって溜めこんだ財産は、地方に城を建てられる程である。

……そして、現在へ戻る。

「アリカ様、新しい書類をお持ちしました」

書類片手に、離れの別荘の一室、玄関ホールから伸びる廊下の方にある部屋の扉を叩く。アリカ王女の執務室だ。

紅き翼……特に、情報処理を担当しているガトウも此処、王家離宮（と言う名の別荘）に滞在している為に、マリアとアリカ王女の2人は午後からこの別荘に来ている事が多い。

「……………アリカ様？」

そして、異変に気付いた。

普段なら、声を掛けて直ぐに返事があるのだが、今は無い。

——それ以前に、部屋の中から人の気配が無い…………？

嫌な予感がしてきたマリアは、勢いよく扉を開け放ち、室内へと突撃する。

ざっと見渡し、不審物や異常のチェックを行う。当然アリカ王女は居ない。

窓は割れていない。ロックも掛かっている。

壁に穴は無い。ブチ開けてから修復した痕跡も無し。

転移の可能性は捨てきれないが、人が暴れた……つまり、アリカ王女が抵抗したような痕跡も無い。

デスクの上には既に裁決が行われ、印を押された書類が山の様に積まれて居た。

『しごとマシーン』であるマリアが教官である為に、アリカ王女もまた仕事は早い。

念の為、ベッドの下や机の下、さらには扉の裏もチェックしてみたが、アリカ王女は見当たらない。

「……………居ない!？」

「ん、うあ……ふあ……んあ？」

欠伸ひとつ。ナギはベッドから起き上がった。
鼻っ面が妙に痛い事を気にしつつ、とりあえず辺りを見渡す。

寝ていたのは清潔感溢れるベッド。シーツ洗濯済み。
ベッドの隣、壁に杖が立てかけられている。ナギのモノだ。
窓辺には花が活けてある。清涼感アップ。

窓の外に広がる風景は、王都オスティアだった。正面には王城が見える。

——つまり、此処は何所だ？

「やっと起きたか」

ふと聞こえた声に窓から視線を外し振り向くと、其処には白い口
ーブを身に纏った人物が座っていた。

誰がどう見ても、ナギの顔面を殴った人物、

「あー……ああ！ テメエ不審者じゃねえか。何を考えてやがる」

ナギは素早く傍に立てかけられていた杖を手に取り、警戒する。眼の前の人物は確かに不振人物であり、現在拠点として用いている別荘でウロウロしていた人物だ。もしかすると、完全なる世界の一員かもしれない。

そんなナギを見て、はあ……と溜息をついた白いローブの人物は、目深に被っていたフードをばさりと下ろした。

一方同時刻、アリカ王女が居ない事に気付いたマリアはデスクの中央、署名済みの書類の隣に一枚の紙が置かれている事に気付いた。手にとって読んでみるとそこには、

『ちょっと街まで出てくる。日が暮れる前には戻る』

——とだけ、書いてあった。

「……………あの御転婆王女、この戦時下は何考えてるのよ!？」

フードを下ろすと、中に収められていた金糸の髪が零れた。
鋭く射抜く視線は碧と濃紺、左右別色。

「……姫様じゃねーか！」

「今更気付いたのか。遅いぞ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6399p/>

僕の母親は女神様なのです。 ~ Diva ex libellus ~

2011年11月20日17時51分発行